

---

# 東方御伽草子

ナナツボシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方御伽草子

### 【Nコード】

N4962X

### 【作者名】

ナナツボシ

### 【あらすじ】

幻想郷の人里にある屋台を通じた人間模様。とくに戦闘も弹幕もなく、幻想郷に住まう者達の一コマを切り取ったお話です。作者の嫁を中心に、まったり更新予定です。

リハビリがてら書いてみた東方小説です。子育ての合間の息抜きなので、メインの連載どないやねん！と言う至極当然なツッコミは勘弁して下さい。

## ある兎の話

ここは幻想郷と言つ。

ここに住まう存在は、妖の類い、妖精、幻獣　つまりは我等人間が生まれ、人生を営み、そして朽ち果てる間に備わる常識から外れた存在である。

要は人間が娯楽として接する創作物　昔話、絵本、小説、映画などの所謂フィクションの世界に存在しうる者共が当たり前のように営みを形成しているのだ。  
そして少なからず人間も含まれる。

この場所の管理者と言つ存在は、やがて完全なるフィクションになる前に、全ての”現実に”存在している者達を箱庭に隔離したのだ。故に箱庭の外に住まう人間にはフィクションの中の創作物だとて、現実に存在しているのだ。

それが幻想郷なのである。

東方御伽草子

ここは幻想郷の中にある人間達の集落である。それなりに人が住み、それなりに栄えており、そしてそれなりに物語が生まれる場所である。

夕暮れの通りには様々な商店が立ち並び、道行く者達に威勢の良い声が飛び交う。あちらでは惣菜を、こちらでは野菜売りがダミ声を飛ばす。

辻売りの八つ目鰻の屋台には既に出来上がった酔っ払いがクダをまき散らし、場違いな西洋風な使用人服の女が冷やかな視線で通り過ぎていく。

ここには確かに営みが存在していた。ただ、それは人間に限らずと言う注釈がつくのであるが。

ひとつ間違いないのは、ここには調和があるという事であった。

3

さて、この人里の入り口付近の薄暗い場所に、少し中にある屋台とは趣の違う店があった。

店構えは屋台なのだが、周りに何も無い場所にぽつんと建っている。

この人里を纏める立場でもあり、人格者である寺子屋を営む女性に言わせると、こんな危ない場所に出店など正気の沙汰ではないらしいが、無愛想で有名な店主は一向に聞きはしないのである。

その屋台の名前は「喰いものや」と言うなんのひねりもない暖簾を掲げ、半年前あたりからひよっこり現れた。

気が付いたらそこに在り、気が付いたら当たり前前に馴染み、少なからず常連が付いている。

これはそんな不思議な屋台にまつわるおはなしである。

「だからさあ、あたしだって頑張ってるのよ！ねえ聞いてんの？無視すんなオヤジのくせに！悪いと思ったら……ひつく、賽銭いれに來なさいよ！……あ、おかわりちょうらい、ひひっ……」

「黙れ不良巫女……ツケ払ってからいいやがね。……おらっ熱爛だ」

「んふ〜おやつさん好き〜ひつく」

「ちっ……調子いい奴め……忌々しい……俺はまだ二十代だ馬鹿野郎」

どうやら今夜の客は店主曰く不良巫女だけらしい。赤いリボンが麗しい巫女がへべれけになっていた。

テーブルに突っ伏したまま酒を呷る巫女姿の少女を眺め、店主の男は洪面にキセルを啜えていかにも迷惑そうに唸っている。

ただ、文句を言いながらも酒を出す辺りは説得力にかけろのだが。

「おっちゃん、なんか喰わせてくれよ！お、霊夢は出来上がったんな！」

「ちつ……またすかんぴんがきやがった。おらっ、飲め。そしてツケ払え」

「そういつても喰わせてくれるおっちゃんカツコいいぜ！愛してる」

「阿呆が。喰ったらこの不良巫女連れて帰れよ。胡散臭い魔法使い」

巫女に続いてとんがり帽子の白黒な少女が飛び込んできた。店主と軽口を交わす辺り、この娘も常連らしい。

こうしてこの屋台の夜は更け、それなりに人が入れ替わっていくのである。

最後の客が機嫌よく立ち去り、店主は屋台をたたむ準備を始めた。店主は伸びを一つしながら釣り銭箱を覗き、そして深いため息をついた。どうやら今夜も赤字らしい。

「……あの腐れ巫女」

ぼつりと悪態をついた店主は、釣り銭箱の中から一枚の紙を摘みあげて忌々しそうに丸めて捨てた。紙にはこう書いてある。

博麗神社と

それでも一日の労働に心地よい満足感があるのか、店主は少しだけ微笑して片付けに戻るのだった。

「ふう……こんなもんか。さて、労働のご褒美つと……」

一通り片付けが終わった店主は、にんまりとしながら豆腐の炒ったものと熱燗を自分の為に用意し、遅い夕食を摂るようだ。

「今夜も月は綺麗だね〜つとくらあ……ん？また来たのか兔」

店主が座るテーブルから見える木陰には、外の高校生のような制服を着た兔の耳の少女が立っている。

「あ、あの、ごめんなさい、えっと、通りかかっただけで、その」

「おい兔、腹減ってないか？」

あわてて支離滅裂な兔の少女に店主は声をかける。

「えっと、その、はいっ、減ってるかと聞かれたら減っていると答えますが、その、はい、いえ、ごめんなさい」

「……こっちこい兔。寒いだろうからなんか温かいの作ってやる」

「あの、いえっ、だから、その」

「……来い」

「ひゃいつー！」

わたわたと挙動不審な兔の少女に、店主の優しい一喝が止めを刺し

たらしい。兎の少女はおどおどと、そして素晴らしい速さでテーブルについた。

席についたものの、兎は銅像のようにお行儀よく固まったまま、愛らしい耳を垂らして俯いていた。店主はそれを横目で見ながら鍋を振っている。

とんっ

やがて兎の前に、食欲をそそる湯気がたち登る丼が置かれた。

「食べな。暖まるぞ」

店主を上目にちらりと見た兎は、すぐに慌てて視線を逸らす。ただ、小さく可愛らしい鼻はひくひくと、湯気に混じる美味しそうな香りに反応している。

井には何かの腸詰めと、武骨に乱切りされた人参や芋の類いが煮込まれた汁が入っている。

「ポトフってんだ。暖まるから遠慮なくやりな？」

「は、はひっ、あ、ありがとうございます」

「いいから慌てないで食べ。俺も夕飯食うからな。慌てないで食べ」

「……はい」



「ん」

相変わらず顔は伏せたままだが、兎はやがて確りと頷き、そして食べはじめた。

幻想郷は今春先である。だが、夜半はまだまだ冷えるのだ。兎が食し、ほう、と吐く息は少し白い。

店主はすっかり冷えた銚子の酒を手酌で飲みながら、彼の唯一の嗜好品であるキセルをふかす。因みに酒は嗜好品では無く、水であると言つのが彼の持論だ。

「……ご馳走様でした。えっと、美味しかったです。はい」

いつの間にか食べ終わった兎が、やはりちらちらと店主を盗み見るように見上げていた。

「お粗末様だ。あとこれ持ってけ」

ぽんつと兎の前に大きめの折り詰めが置かれた。

「へっ?」

「ああ、余った料理だ。お前、ちょいちょいこの辺来るだろ? 薬担いでうるうるしてるもんな? だからさ、きつと家族もいるんだろ? さ。遅くなった言い訳に土産持ってきな」

にやりと笑った店主はぶっきらぼうに言った。

「わ、わ、ありがとございませう! あ、でもお代が足りないかも、

です…」

不安気な兎に店主は豪快に笑った。そして

「今日は俺の奢りだよ兎。しょっちゅうウチの店に入りたそうに眺めてたお前さんが、漸く来てくれた記念だ。ありがとうな？来てくれて」

そついつて不器用に片目をつむる店主に、兎は暫くぽかんと目を見開き、そして顔を真っ赤にして何度も頷いた。

兎は嬉しかった。

この見た目は冷淡にも見える少女は、その実ひどく臆病なのだ。

されど内気ながらも寂しがりやな性格から、他人と関わりたくとも自分から踏み出せない難儀な性質だ。

薬師を営む師匠の手伝いで時折人里にやってくる少女は、帰りしなに見かける屋台にいつも笑い声が絶えないのを知り、自分もあの輪に入れたらなと思っていたのだ。

だが、性格とは中々かわれない。

そして兎はいつも屋台を眺めては寂しそうに帰っていくのだ。

「あの……鈴仙です」

「んん？」

「えと、その、私の名前、鈴仙です。兎ですけど、鈴仙なんです」  
少女は確りと、真つ赤な目を店主に向けた。

「そうかい、鈴仙。俺は次郎だ。宜しくな？どっかの腐れ巫女みたいにオヤジ呼ばわりは許さんぞ？」

そしてまた不器用に片目をつむる店主だった。

「……ふふっ、わかりましたジロさん。私も兎呼ばわりは許さん、です」

「あはは、お前さんも言うね？ ま、次からは金とるからまた来てくれ。さっ、遅いから帰んな？」

二人で少し笑いあい、そして鈴仙は帰っていった。土産を胸に抱えて。

こうしてある日の屋台の一日は終わるのだった。

「おい、鈴仙！」

「はいつ!?!」

歩きだした背中に店主の声飛び、びくりと身体を揺らす鈴仙。

「必ずまた来いよ？」

「……………はいつ!?!」

笑顔が弾けた。

つづく

登場人物

次郎と言う名の店主

人格者の寺子屋の女性

霊夢と言う名の腐れ巫女

胡散臭い魔法使い

鈴仙と言う名の兎

ある兎の話（後書き）

うどんげ可愛い。ウサミミにブレザーなんて卑怯だと思います。

心の隙間、埋めますか？

宵の口、人里の外れにある屋台では、無愛想な店主が黙々と仕込みをしていた。

ここは「喰いものや」

妖し達が集う不思議な屋台である。

### 東方御伽草子

この喰いものやを営む店主である次郎は、人里の住人からは変り者と呼ばれている。というのもこの幻想郷と言う場所は、人間が圧倒的に弱者である。

次郎はそんな人間にとっては物騒で世知辛い土地で、好きこのんで妖し相手に店を開いているのだ。

寺子屋の女主人が次郎を「正気の沙汰ではない」と称したのも頷けると言うものだ。

次郎自身は一切の自己主張をしない上に、鳥や野菜類は自給自足し、僅かな足りない物を人里にて買う程度だ。必然的に人里とは疎遠になる。

次郎はただ、寡黙に仕込みをし、当たり前前に店を開くのみであった。淡々と。

すっかり日も落ち、人々が家路につく頃には、次郎の仕込みも佳境に辿り着いていた。その日使う肉の下拵え、作りおきの煮込み等、出来るだけこまめにそれは行われる。

何せ従業員はいないのだ。次郎が一人で全てを取り仕切らなければならぬ。故に仕込みで料理の手間を七割がた終わらせておくのである。

そして今日の仕込みも滞りなく終わらせ、次郎は一人満足気な溜息をついた。

「次郎様、もう開店してるのかしら？」

一段落して一服つけていた次郎に、闇の中から鈴の音のような声が響く。

「ふん、どうせタイミング見計らってたのだろうに。まあ座んな、隙間の」

キセルをかん、と叩きつけ火種を飛ばすと、次郎は虚空を見た。

屋台の淡い灯りの向こう側にある暗闇に、更に深い漆黒が開き、無数の目玉が散らばった。その中から異国風の帽子をかぶった、少女



の様でそれでいて全てを達観したような人形然とした美貌の女性が現れた。

八雲紫、隙間の妖怪と言われる幻想郷の管理人たる大妖怪であった。

「ふふっ、客に言う台詞では無くってよ？次郎様。そこが貴男らしくていいのだけれども。ではお任せでお願いするわ」

口元を扇子で隠しながら、少女たる姿に妖艶さを撒き散らし、八雲は席につくのだった。

次郎は伝法な口調ではあるが、それでも手早く肴を身繕い八雲の前に並べた。彼女の好きな濁り酒を添えて。

八雲はその細い喉をこく、こく、と鳴らし、冷えた濁り酒を嚙下していく。そして、ふうと一息つくくと次郎に微笑した。

「おいし。ねえ、この肴はなあに？」

「もやしを炒めて卵を絡めたただけだ。お前さん、いつも疲れた顔をしているからな。女が必要な栄養はもやしに沢山入ってるんだとよ。黙って食え」

目だけで微かに笑いながら、次郎は八雲に講釈を垂れた。

「あは、この幻想郷で私を女扱いするのは貴男だけよ？だって、歳だけは誰より上だもの。口の悪い吸血鬼に言わせると婆ですってよ？」

芝居掛かった口調で八雲はおどけると、少し”しな”を作って次郎を見た。

「女の年の話は御法度つてな。あんたは充分に女だよ。下らねえこと言つてないで飲んで食え」

「あら、うれし。口説いてくださるのかしら？」

「……阿呆が」

鼻で笑った次郎がまた一品八雲の前に置く。今度は鶏肉を湯がいて薄く切り、山葵醤油を添えた物だ。

「大体な、八雲がくる日は決まつて他の客がきやがらねえ。お前さんが怖いらしい。だが、まともに金を払ってくれる客もまたお前さんくらいなもんだ。つまりは憎たらしい上客様を俺は逃がす訳にはいかんだよ。忌々しい事にな」

ぷつとキセルを吹き、新しく葉を詰める次郎だったが、僅かに笑っている。彼もこのやり取りが万更でも無いようだ。

そんな次郎の無骨な優しさに、八雲はやはり扇子で顔を隠しながら”芝居掛かっていない”笑みを浮かべるのだった。

夜露が暖簾を濡らす。

十六夜の月が真上に浮かんでいる。

「……次郎、聞いてるの？もう、みんな私の苦勞をわかってくれな

いの。でもね？でも、私はこの幻想郷がだ〜いすきなのお。だから頑張るのお。こら次郎！聞いているのかあ！」

「あいあい、聞いてるよ。紫は大変だね。偉いね。うんうん」

「次郎！やい次郎！！あなただけよ……ちゃんと構ってくれるのは……ぐすっ……ぐすっ……むにゃ……」

「……泣きながら寝るなよ面倒くせえ。やれやれ、風邪ひくぞ」

ひとしきり愚痴を垂れた八雲は酔い潰れ、突っ伏して寝てしまった。そんな彼女に次郎は悪態をつきながらも、自分が羽織っていた藍色の絞りの着流しを彼女の肩にかける。

猫の毛のようにしなやかな金色の髪をちらばせ、僅かに紅がひかれた薄い唇を半開きに眠る八雲。今の彼女には妖艶さも強かさも消え失せている。ただの疲れた少女でしかない。

そんな彼女の姿を眺められるのも役得かもしれないと思案する次郎だった。

「……………眠ってしまったようね」

ふと目を覚ました八雲が呟いた。

「……………そうだな」

「これ、次郎様の着流し。ふふっ、いい匂い」

「……阿呆が」

目は覚めたが瞳は少し虚ろな八雲が次郎の着流しを抱き締める。

「……なんで？」

「ん？」

「なんで優しくするの？貴男少しおかしいわ？」

「今度は絡み酒か？」

片方の眉を器用に上げながら次郎が溜息をつく。

「……貴男、恨み言ひとつ言わないじゃない！責めなさいよ！私を責めたらいいじゃない！この人さらいって！」

急に激昂した八雲が次郎の胸ぐらを掴む。次郎に唾を飛ばしながらいきり立った彼女は自分を責めると慟哭する。

「責めてよ……責めて欲しくて通ってるのに」

やがて力なくへたりこんだ八雲。涙で汚した次郎の襟をつかんだまま。

「……責めて、どうにかなるのか？」

「だって!!」

「……黙れ。あれは事故だ。事故は不幸だが誰も悪くは無いんだ。

ぐぐぐだいつまでもガキみたいに自分を痛め付けるな」

「……………だって」

妖しである八雲紫の力、『境界を操る程度の能力』はあらゆる境目を曖昧にし、自在に操ると言うものだ。

この幻想郷とは、博麗の巫女による大結界により外から隔絶されている。そして、八雲紫の境界を操る能力により中と外を行き来してバランスを保っているのである。

妖し、幻想の生き物、それらは全て人間がいてこそ存在しうるのだ。

人間が夢想し

人間が恐怖し

人間が言む。

光があるなら影が存在できる。人間が光ならば、その影が幻想なのだ。

だが人間は自然の理の序列では弱くとも、それを補って余りある知識と知恵がある。それは人間の生活を豊かにし、そして自然の理を歪にってしまった。

最早人間に自然への潜在的な恐怖は皆無となり、ある意味互いに共存関係であった幻想の生き物は必要無くなった。

脆弱で一人で立つことも覚束ない生き物だった人間は、今や何一つ不自由無く立ち、空すら支配した。

全ての”くびき”から独立し、星の王者たる人間。ある意味それは妖しよりも化け物然としており、本来の化け物は役割を失った。

つまり幻想は真の意味で幻想となり、その産物たる妖しは役目を無くす。

後に待つのは滅びだ。

八雲はそれを是とせず、幻想郷を作った。

妖しを集め、古来からの自然を受け容れる人間を集め、小さな箱庭を作った。

それは一つの世界であり、森羅万象であった。

それは八雲紫の独り善がりたる産物かもしれない。

だが彼女は愛しているのだ。理解はされなくとも。

だから八雲紫は境界を操るのだ。忘れ去られようとしている外の存在を引き込むために。

ある日八雲紫は外の世界にいた。ある妖しを保護するために。そして、実際に引き込もうと隙間を開いたその刹那の話だ。

妖しが隙間に落ち、安堵した八雲紫が見たものは、驚愕に目を見開き隙間に消える人間の姿だった。

最早作業でしかない八雲紫の仕事は、それ故に油断していたかもしれない。

だが、嘆いても遅かった。予定の無かった人間の男は、間違いなく隙間に落ちたのだから。

慌てて追い掛けた八雲紫が見たものは、幻想郷の上空から落下して、ばらばらに飛び散るはずの惨状 ではなく、地面に叩きつけられる寸前に気絶したまま何らかの能力を発現させた男の姿だった。

男は気絶したまま地上約一メートルに”浮いて”いたのだ。

呆然とそれを見つめる八雲紫だったが、それはある事実を示していた。

それは、巻き込まれてここにいるこの不幸な男が、もう外の世界には帰れないと言う事柄である。

はからずも幻想郷の存在を知ってしまい、なおかつ、外の世界で幻想の産物でしかない超自然的な能力を発現してしまった男。

それ故に幻想郷の管理者たる八雲紫は、自らの責任と幻想郷の秩序の為に男を縛り付けた。男の意志がどうだろうと、だ。

だが、男は受け容れた。残酷で不条理な運命を。

搾りだすように苦々しく語る八雲紫を真っ直ぐ見つめ、一言も言葉

を発しなかった男は、彼女がひとしきり語り終えた後にこう言ったのだ。

「宜しくたのむ」と。

そして、色々ありながらも今に至り、男は何となく幻想郷に溶け込み、八雲紫は罪悪感に苛まれていると言う訳だ。

「……俺は、お前さんを恨んじやいないよ。俺は向こうじゃクズだった。情性で生きて、霞みたいなもんだったよ」

ぼつり、ぼつりと次郎が語る。八雲はそれを無言で見上げる。

「だから、何も無かったんだよ。俺と言う存在は。……そうだな、確かに不幸過ぎる出来事だったのかもしれない。だが、俺は今こうしてだ、何となく幸せだと感じてる。だから、いいじゃねえかそれで」

次郎の独白を夢遊病のように見上げる八雲。縋るような視線。打算かも知れない、だが八雲は待っている。ある言葉を。

くしゃっ

その時次郎の節くれた手が八雲の髪を撫でた。

「……だから、許すよ。俺は八雲を許す。そして、新しい人生をくれたお前さんに感謝する。ありがとうな、八雲」



八雲の目が大きく見開かれた。待っていた。欲しかった言葉を次郎は発した。

「許す」と。

「あつ、ああつ、次郎」

縋る八雲。

「……阿呆が。もう看板だ。帰れ帰れ」

しっしつと手を払う次郎に、八雲は失礼ねと形の良い眉を八の字にする。そして小さく呟いた。

「ありがとう」と。

そんな八雲を尻目に黙々と片付ける次郎。それをにんまりしながら彼女は残りの酒を呷る。

そしてすっかり片付いた屋台を眺め、満足そうに次郎は頷いた。

「……まだ居たのか。とつとと帰れよ」

「ええ、帰るわ?」

すっかり正気を取り戻した八雲は、扇子で口元を隠して笑っていた。  
”芝居掛かった”笑みで。

「……お前、ちよつ、何企んでやがつ!!!?おわあああああ!!!」

！ちつくしよおおおお………」

次郎の足元に隙間が開き、彼は呪咀と悲鳴をあげながら消えていった。

「ふふっ、まだ飲み足りなくてよ次郎」

静寂

登場人物

次郎と言つ名の店主

八雲紫と言つ名の妖し

名も無き妖し

## 心の隙間、埋めますか？（後書き）

相変わらずの駄文ですいません。リハビリですからご勘弁を。

今回は八雲紫でした。この人すごく好きなんだけど、二次作品ではやたらと婆扱いか、お姉さんキャラで描かれる事が多い気がします。

そして、人さらいとか、フィクサー的なポジションが多いですよ。でもたしか幻想郷に来る存在って、外で忘れ去られようとする存在なんですよ、たしか。

個人的には永夜抄までしかやってませんが、どうみても少女にしか見えないので、この作品の設定としては「精神年齢は見た目に起因する」と言う前提で書きました。

可愛いからいいんです、はい。

僕は某動画サイトで人気のあるアレンジ曲や、大手同人屋とかには興味は無く、単純に東方の力オスな世界観が好きです。

東方のどうしようもないB級感がたまらないのです。チープなSTGに不思議な世界観、まあ、Normalをひいひい言いながらクリアする程度の能力なヘタレですが。

まあそんな感じで、あまり二次作品のステレオタイプに引っ張られないように書けたらなと思ってます。

中々難しいですが…。

## 裏設定

すっかりタイミングを失った、主人公紹介

名前 次郎

容姿 短髪黒髪高身長。痩せ形で三白眼のこわもて。x x x H O L  
i Cの百目鬼をイメージして下さい。(分からなきやググレ)

過去 無作為に惰性で生きてたらしいが詳しくは不明である。

性格 基本的に無愛想。無口。ただ、たまに語る。たまに笑う。

仕事 幻想郷の人里の外れにて、喰いものやと言つ名の屋台を営む。  
料理や酒は美味いらしい。種類は多国籍でその日の仕入れと次郎の  
気分で変わる。

能力 八雲紫しか知らないが、何らかの能力があるらしい。いずれ  
語られる…かも知れない。

さあ、次は誰出そうかな…

## 最強の泣き虫

幻想郷の人里の外れ、妖し達が集う屋台がある。名前は「喰いものや」

そこは毎晩笑い声に溢れ、普段は反りが合わない妖し達が触れ合うと言つ。

これは、そんな屋台を営む男が織り成す不思議な物語である。

## 東方御伽草子

幻想郷にある名物屋台の店主である次郎は、夜明けと共に畑の世話をしていた。

茅ぶき屋根のこじんまりとした一軒家が次郎の住みかである。その庭一面に次郎の畑があった。

綺麗に耕され丁寧な作られた畑は、次郎の几帳面な性格を表しているようだ。

「ふう、腰が痛いな」

野良仕事着の次郎は、長時間腰を曲げていた辛さから、天を仰いで腰を叩いている。但し顔に笑みを浮かべながら、だ。

ひとしきり作業が終わり、次郎は畑の端にある石窯に火を入れた。

この窯は次郎が山から運んできた石を積み上げて作った、彼自慢の自家製石窯である。

彼が幻想郷にくる前には怠惰な生活をしていたと言う。そんな彼が何故にこんな立派な窯が作れたか？ それは彼の能力の恩恵であった。

彼の能力、それは”くつつけたり離れたりする程度の能力”である。

この能力は次郎の視界にある物を、文字通りくつつけたり離れたりを任意にする事ができる。

くつつける　どんな物も溶接したかのように癒着、圧着、融合させる。

離れる　どんな物（自分の身体含む）も任意に切り離す。切断できる。自分自身を地面から離す、つまり浮く事も含まれる。

と言う訳で、かなり汎用性に溢れ、応用が効きやすいと言える。

対象が生物と考えたら、とても恐ろしい効果を発揮するだろう。ただ、次郎は今のところは生活の中でしか使ってはいない。

ある意味物騒な能力であるからこそ、八雲紫は次郎を縛ったのかもしない。

## 閑話休題

窯に火を入れた次郎は、そのまま井戸で汗を流し、寝起きに仕込んでいたパン種の発酵を台所に確認しに行く。

「ん。頃合いだな」

発酵を確認した次郎は手早く成型し、焼き上がりを思ってニヤニヤしながら窯にむかうのだ。

しっかりと温度が上がった窯に次々と成型したパン種を並べ、鉄の蓋をする。

満足そうな次郎は、焼き上がりまでの時間を窯の前で過ごすらしい。とにかくこうして彼は毎朝パンを焼くのが日課なのだ。

次郎は丸太に腰掛け、やはり自作の煙草盆を引き寄せ、キセルに火を付ける。

この時間こそが次郎の至高の時なのである。

初夏の涼しげな風が次郎を吹き付け、鳥の声に耳を傾ける。自然と目を閉じ、ゆっくりとした時間の流れを噛み締める。

「幸せだな、俺は。八雲に感謝だ」

誰とも無くそう呟いた次郎であったが

「やあ次郎、おはよう」

「次郎さん、ご相伴に与りに来たよ！」

そんな静寂を次郎は許されならしい。

「おはよう、慧音、妹紅。このハイエナ共め」

「あつはつは、そう言うな。お前のパンが美味しいのを恨め」

「そつだよ次郎さん、あなたが悪い！」

「けつ、惜きゃがね。まあ後少し待ちな。おい妹紅、締めた鳥は台所な？」

「ありがとな、次郎さん」

次郎の庭に入ってきたのは、人里の顔役で寺子屋の主人の上白沢慧音とその親友の藤原妹紅である。

慧音は次郎がこの家を借りる際に世話になり、妹紅は次郎の店の常連であり、たまに次郎が育ててる鶏を買っていく関係だった。妹紅の焼き鳥は絶品である。

「うっん……たまらないな、この香ばしい薫り」

「幸せになるね……」

恍惚と涎を垂らす二人の女性を生暖かく横目で見ながら、次郎は釜



を開けた。

中からは黄金色に焼けたパンが現れた。

「ほら、焼けたぞ。一人二個までだからな！」

お預けを食らった犬の如く、食い入るようにパンを見つめる二人に、次郎はやれやれと言う表情で言い放った。

大小様々のパンは、だいたい二十ほどあるだろうか？それを次郎は次々と籠に入れていった。

「ねえ次郎さん？四角いやつは無いの？」

妹紅が言う四角いやつとは所謂食パンである。次郎は毎日違うパンを焼くのだ。

「今日は無いな。この細身のがバゲット、太目がバタールだ。ほれっ！」

次郎は説明しながら二人の口に焼きたてパンをちぎって放り込んだ。

「むぐむぐ……」

「あむあむっ……」

リスのように頬を膨らませて一心不乱に咀嚼する姿が愛らしい。

「う、うまい……」

「だろっ？バゲットはかりかりに焦げたのが最高なんだ。さて、朝飯作るから食ってけ」

「次郎〜愛してる〜」

「……はいはい」

調子の良い欠食児童を放置して、次郎は台所に消えていくのだった。次郎の人里の住人との関わりは稀薄であれど、こうして彼を慕う人間は微々たるならがにいるようだ。やはり妖しの類いであるのだけれども。

次郎は手早く身仕度し、焼き上げたパンでサンドイッチを作った。半分は三人の朝食として消え、また半分は彼の弁当に化けた。

彼は大きめの厚い布で出来た背負い鞆に荷物を詰めると、二人に別れを告げて魔法の森へと歩いていくのだった。

次郎は数日に一度、徒歩で行ける範囲にある野山に入る。それは畑では得られない山の恵みを手に入れるためである。

この季節は初夏であるから、山菜の類いは時期が悪い。そこで最近「は店の常連である」胡散臭い魔法使い”の勧めもあり、魔法の森にてキノコを狩っている。

魔法の森は一年中キノコが生えている。但し、その大半は所謂毒キノコに分類され、中には爆発したり、身体に変化を及ぼしたり等とおよそキノコの範疇を越えた効果を発揮するものもある。

これらはまさに幻想郷たる由縁とも言えるが、幸い次郎はいい意味でかつての常識は捨て去っている為、特に慌てたりはしない。

胡散臭い魔法使い曰く、「色が薄めのキノコは食べれる」とのアドバイスを受けたが、残念ながら次郎はそれを信じたために一週間もの間、肌が緑色になるという快拳を成し遂げた。

以来、彼の新たな常識として、魔法使いのアドバイスは信じないと言うものが加えられた。まあ、某人形使いや、某図書館の住人等はいい迷惑であろうが…。

何れにせよ次郎は自力での試行錯誤の末、外の世界で食べたような安全なキノコの選別は完了している。自身の犠牲を持ってであるが。

#### 閑話休題

そんなわけで次郎は現在、新緑萌える森の木漏れ日を浴びながら歩いていた。

魔法の森は、まるで太古からそこにあつたような儼かな佇まいでそこにあつた。次郎が昔、図鑑で眺めたような景色がある。

その中を次郎は、気持ちよさそうに進んでいた。

今日、彼が求める獲物は、向こう側でいうエリンギに似たキノコで、歯応えのある美味なキノコだ。

それを縦に割いて細くしたものにパン粉で衣をつけて揚げたものが、現在次郎の屋台で一番人気の肴となっている。

残念な事にそのエリンギもどきは群生しておらず、次郎はあっちこっちと彷徨うようにそれを狩っていく。そんな手間も”おつ”であると感じるのが、彼の幻想郷での生活が満足のいくものであるのを示している。

そうしてキノコを狩りながら魔法の森を抜けて湖にたどり着く頃には、彼の背負い鞆はキノコでパンパンに膨らんでいた。

次郎はいつも森を抜けると、湖のほとりに腰掛け、対岸に見える場違いな紅色の館を眺めながら一服つけるのがお気に入りだった。

本日もご多分に漏れずそうしようと、やはりお気に入りの巨石の椅子を目指して歩いていたのだが、何故か今日は先客がいた。

次郎がふと立ち止まり眺めた先には、巨石の上で膝を抱える、水色の小さな妖精がいた。

「やあ、こんにちは」

ひとまず次郎は挨拶してみる事にした。早く一服したいという本音もあるが、その妖精の佇まいに打ち拉がれた印象を受けたからである。

「…………人間があたいの縄張りに何のようだ…………」

やはりなにやら覇気が感じられない。次郎の印象として、妖精とは悪戯好きで奔放な生物なはずだ。次郎は「ごめんよ」と一言断り、水色の妖精の横に腰掛けた。

「俺は次郎と言った。君は名前はなんて言うんだい？」

「……あたいはチルノ。さいきよーの妖精さ……」

チルノと言う妖精は、膝を抱えて俯いたままそう言った。

次郎は「そうか」と呟き、弁当を開いてサンドイッチを頬張った。湖を吹き抜ける風が心地よい。

気が付くとチルノは、ちらちらと次郎を窺っていた。だが彼は敢えて気が付かないふりをして、自慢のサンドイッチを淡々と咀嚼していく。

「食べるか？」

「……いいの？」

「……いいさ」

次郎はチルノの顔ほどもあるサンドイッチを彼女に渡した。彼女は無言でそれを両手で抱え、小さな顎を一生懸命動かして食べた。

彼女は口いっぱい頬張りながら、やがてポロポロと涙を流しはじめる。泣き声は必死で堪えながら。

「うまいか？」

「……まあまあね……つく……少しは……ひっ……おいしい……」

「そうか、嬉しいな。それは俺の手作りなんだ」

そしてまた、二人は無言でサンドイッチを頬張る作業に戻った。

「チルノは何故泣くんのだ？」

「泣いてない……ぐしゅ……」

次郎はキセルに火を点け、紫煙をくゆらせた。立ち登る煙は、あっという間に湖に吸い込まれた。

「あたい、嫌われたんだ。大ちゃんも、リグルも、ミステリアも、ルーミアも、みんなあたいを嫌いになっただ……」

ぐしゅと鼻水を垂らしながらチルノは呟いた。

「そうか。どうしてそうなったか分かるのか？」

「……あたいが……あたいが我儘言ったから……ぐしゅ……だと……ぐえっ……思っ」

次郎はキセルに葉をつめ直し、また火を点けた。

「お前は寂しいのか？」

こくこくとチルノは何度も頷き、ぼたぼたと涙が落ちた。

「なら簡単だ。魔法を使えばすぐ元通りだな」

「へっ?…まほー?」

「そつだ。さいきょーじゃなくても使える簡単な魔法だ」

次郎は初めてチルノに視線を向けた。

「知りたい!ジロー、あたいたい知りたい!」

「そつか、じゃあ特別に教えてやる」

チルノが次郎を見上げ、期待の籠もったような、縋るような目で見ている。

「それはな……」

「それは!?!」

次郎はニヤリと笑った。

「ごめんなさい、だ」

「へ?」

「ごめんなさいと言えばいいんだ」

チルノは俯いて唇を噛んだ。

「……許してくれるかな？」

「怖いか？」

「……怖い」

「チルノはさいきよーなんだろ？」

「あたいはさいきよーさ……」

「なら、大丈夫だ」

「……頑張ってみる」

次郎は立ち上がり、帰り支度を始める。

「帰るのか？」

「ああ。またな、チルノ。頑張れよ、さいきよーの妖精」

次郎はふわりと浮き上がり、ゆっくりと進んで行く。そして森の上にさしかかる頃

「ジロー！ありがとう！ジローはあたいの子分にしてあげる！またねジロー！バイバーイ！」

次郎はくすりと笑って森に消えた。チルノに笑顔が溢れた。



そんなある日の出来事だった。

## 登場人物

人里の顔役、慧音

焼鳥の名人、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

さいきよーの妖精チルノ

大ちゃんと言う名の妖精

リグルと言う名の蛭妖怪

ミスティアと言う名の夜雀

ルーミアと言う名の妖精

**最強の泣き虫（後書き）**

チルノっておませな姪っこみたいで可愛いです。

もこたんinnしたお

だけどまだモブだよ。

そのうちメイン昇格予定

礼儀の妙（前書き）

いっ  
たい  
何を  
書き  
たか  
った  
のか  
が謎

## 礼儀の妙

この幻想郷には、夜中でも笑い声が絶えない風変わりな名物屋台がある。

その名前は「喰いものや」

店主は無愛想だが、料理と酒は上等と評判だ。常連客はみんな綺麗所らしいぜ。

おっとそこなお兄さん？鼻の下伸ばすのは勝手だが慌てちゃいけねえよ。

何しろその常連客ってえのは、どいつもこいつも怖え怖え妖しだつてんだ。

料理食いに行つて逆に喰われたら世話もないわな。

度胸があつたら行つてみなあ！

## 東方御伽草子

秋も深まり、薄着では歩くのが難儀な寒さの幻想郷。今年は豊穰の神様もご満悦なほど、人里は豊作の慶びに沸いていた。

人里の名物屋台の店主、次郎の畑も同様に豊作であった。根菜類が山のように収穫できた様で、普段あまり笑わない彼が畑の真ん中で微笑んでいた。

収穫されたものが料理になった姿でも思い浮かべているのかもしれない。

「ふう、こんなところかね」

次郎は掘り終えた里芋とサツマイモの山を振り返り呟いた。さらに視線をずらし縁側を見れば、鶏肉の礼だと妹紅が獲ってきた丸々とした丹波栗が山盛りになっている。

そんな和な光景を眺めていた次郎は、ふと思索の海に落ちた。ある日の記憶が蘇る。

次郎が幻想郷に来る前、彼はいたって普通のサラリーマンであった。そして機械仕掛けのブリキの玩具のように、決まった動きを繰り返す毎日であった。

地方都市の普通の家庭に生まれた次郎は、一生をこんなつまらない田舎では暮らしたくないと、東京の大学へと進学した。

その大学生活の中で彼は彼女に出会った。

花のように笑う彼女に次郎は夢中になり、まるで自分が別人になったような錯覚を起こす程、世界が薔薇色に見えた。

彼と彼女は当たり前のように恋に落ち、当たり前のように口付けをかわし、そして当たり前のように体を契った。

熱病のような恋がいつしか愛にかわった。それは互いが互いを半身であると思える程に。

二人は将来を約束し、次郎が就職して数ヶ月たった頃、彼女は身籠った。

次郎は身体いっぱいに歓喜を表し、そんな次郎を見た彼女は「子供みたい」と揶揄したが、瞳から溢れる涙はやはり歓喜に彩られていた。

その日の夜、二人は裸で抱き合いながら、改めて幸せを噛み締めあった。そして、未来の予定を語り合う。結婚式はここであげよう、ハネムーンは海外がいい？引越もしよう、あの店で見たソファを買おう。

しかし、それは何一つ叶わなかった。それは彼女の定期検診の時に見つかった、彼女がまだ見ぬ子供かの選択を迫られる病巣のせいだった。

二人で血を吐くほど悩み相談した。だが、最後は彼女に半ば押し切られる形で子供を選択した。

それ以降、次郎は毎晩彼女の頭上に命が燃え尽きる時間が見え、最後は0になり絶望する夢を見るようになった。

次郎にとって彼女は全てだった。情けないくらいに愛していた。

頼む神様、いるなら助けてくれ！俺の命をくれてやる！だからあいつと子供を助けてくれ！次郎は毎日そうやって見たこともない神に縋った。

そんな彼の祈りも虚しく、臨月も近いある日、残酷な神は彼女も子供も奪っていったのだ。

急変だった。

あまりに呆気なく、母子は天に還ってしまった。

次郎は以降、酒で身体を痛め付け、毎晩狂ったように自堕落に過ごした。

死ぬ勇氣すら持てず、ただ自分を騙した。酒に溺れ、女に溺れ、夜毎彼女の幻影にすがりついた。

そんな生ける屍となった次郎は、気が付くと二十代が終わる間近になっっていた。

空虚に支配された次郎が、彼女の月命日に郊外の集合墓地に向かう道すがら

隙間に落ちたのだ。

「でも、どうやら俺は幸せらしいよ。……子、俺、こんな訳の分からない土地だけど、ちゃんと生きてるよ。お前と子供の分ま

で長生きするからな」

次郎はそう呟いた。縁側から眺める、幻想郷の素晴らしい山並みを見ながら。

こんな気分になるのもきつと秋のせいだなと、次郎は自嘲しつつ煙管に火をつけるのだった。

「……誰だい？」

さりげなく目尻の涙を拭きながら次郎は不粋な客に呟いた。

「……次郎様、我が主の命にて、貴方をお迎えに参りました」

次郎が声がする方を見ると、そこにはこの田園風景に似つかわしくない使用人服姿 所謂メイド服の娘が立っていた。その口調は丁寧ではあるが、どこことなく尊大な印象であった。

次郎は軽く首を振りながら溜息をついた。

「……まずお前は誰だ。そして主の名は？名乗りもしない得体の知れないやつについていく馬鹿はいない」

「失礼しました。私は十六夜咲夜と申します。以後、お見知りおきを。そして我が主の名はレミリア・スカーレット、紅魔館が主にして夜の盟主ですわ」

「……俺は次郎、しがない屋台の店主だ。以後、お見知りおかんでもいい」



次郎はぶつきらぼつに言うと、咲夜など居ないかのように煙管に葉を詰めた。

「……次郎様、返事は？」

「返事？ いったい何の？ …… ああ、お前さんの主とやらが呼んでいるって話か？ こう見えて忙しいんだ。 また出直してくれ」

「そうですか、では仕方ありません……」

次郎の拒否に対し咲夜の周りの温度が下がった。 否定など許さない  
そういう事なのだろう。

彼が一瞬まばたきした間に、何をしたのか咲夜は消えていた。 いや、  
正確には……

「……返事は？」

次郎の首筋に銀色の刃が当たっていた。 どういうからくりか、咲夜が  
次郎の後に回っていた。 そして彼の耳に唇を寄せ、咲夜が囁いた。

「ははは、こちらの都合はどうでもいいと。 なるほどな、紅魔館の  
主とやらはどうやらただの下衆らしいな？」

次郎は首筋のナイフなど気にも留めずに言う。 彼は穏やかな口調な  
がら、その心中は怒っていた。 穏やかに亡くなった妻との思い出に  
浸っていた時間を邪魔したのだ。

「……黙れ」

咲夜のどすの効いた呟きと共にナイフが次郎の首筋き赤い線を引き  
た。

「……次はかつ切る。返事は？」

「……後悔するなよ」

次郎が呟いた。

次の瞬間、咲夜のナイフが根元から折れた。彼女があり得ない光景  
に一瞬呆然とした。その間に咲夜は庭に転がっていた。次郎が咲夜  
の髪の毛を掴んで投げたのだ。彼の指にはごっそりと銀色の髪が掴  
まれたままだった。

咲夜は混乱していた。何が起きたのか？次郎は一切動いては居なか  
った。

地面に這いつくばったまま咲夜は考えた。だが、その後頭部を容赦  
なく次郎の足が踏み抜いた。彼女は意識を失った。

次郎が屋台を出店するまでに、実は二年の間準備していた。八雲紫  
の隙間にて幻想郷に入ってから、彼はしばらく何もしていなかった  
のだ。

慧音から空き家を世話してもらい、手荷物の中からいくつか道具屋  
で外の物を売り払い、決して安くは無い金を得た。

彼はそのまま自堕落な生活を続けていた。惰性で生きていた次郎は、  
幻想郷にきたとて無気力だった。心に開いてしまった穴は、容易に

は塞がらない。

次郎は酔い潰れて縁側に倒れながら、答えの出ない答えを探していた。そしてある時、彼は山に消えた。

人里では奇妙な噂が流れていた。近くの山で惨殺された妖しの死体が大量に見つかったと言う。その死体は、小間切れにされていたと言う。

あまりの凄惨な姿に、山に入った里の人間は嘔吐感に苛まれたと言う。サイコロ状に刻まれた肉塊を見て。人間の天敵である妖しが駆除された喜びより、この狂気じみた光景を里の人間は嫌悪した。

そう、次郎の仕業であった。張り合いの無い毎日、もう戻らない日々。幻想入りした事で尚更浮き彫りになった孤独。それを身に染みて改めて理解したのだ。

最初は妖しに喰われてしまえと山に入った。大木によしかかり、静かに捕食者が来るのを待った。

やがて現われたのは巨大な狼のような妖獣だった。それは舌を垂らし、牙を剥いた。食事でありつける歓喜に身を震わせ、それは野生を剥き出しにして次郎に飛び掛かった。

次郎は不思議な光景を見た。踊りかかるそれが、真っ赤な口腔内を露にして自分に近寄っている。それを彼は見ていた。

コマ送りで

死を意識したせいだからか、所謂走馬灯と言う現象なのか、とにかくその鋭い牙が次郎の柔らかい首筋に食い込む瞬間　　それは彼は感じていた。

肌に牙が触れ、沈み、今まさに次郎の生命を刈り取るその刹那……

何かが次郎の中で爆発した。

彼から獣のような咆哮が生まれ、そして何かが降ってきた。

それは血であり肉だった。細かく小間切れになったその肉塊だった。

赤黒く染まりながら彼は叫んでいた。死にたくない！と。この時に次郎と言う”存在”が幻想に産声を上げたと言える。

以来、彼は一年近く森で生きた。獣と言う獣を殺し、幻想郷で生きる術を手に入れたのだ。つまり、自分自身の能力を効率よく使う方法をだ。

幻想郷で生きるとは弱肉強食の理を受け入れると言う事だ。次郎は受け入れたのだ。そして、能力を全て理解した彼は山を降りた。

そして幻想郷に”生きる”一人の存在として、次郎はここにいた。何人も自分の尊厳を犯すことは許さないと言う覚悟を胸に抱えて。

だらしなく横たわる咲夜を見下ろす彼の目は冷たかった。

ふと咲夜は目を覚ます。辺りは既に暗く、見えない。彼女は鈍く痛む頭痛を振り払い立った。

「お目覚めかい？メイドさん。早く帰ってくれないと仕事に行けないんだが」

咲夜が声のするほうを見ると、縁側には次郎が座っている。但し纏う空気は冷たいままだ。

「……あなた、一体何をしたの!？」

はだけた衣服を直しながら咲夜は言う。若干発する言葉の語尾が震えているのは虚勢だからなのだろう。事実、次郎の得体の知れない不気味さに、彼女の冷静さは消えていた。

「それをお前さんに言う必要性はないな。後はなんだったか……うーん、弾幕とか言うお遊びだったか？それに付き合う気もないな」

次郎は暗がりから咲夜を見据え、にやりと笑う。彼女は息を飲んだ。下手な事をすればこの男は自分を殺す。そう感じた。

「ずっと考えてたんだ。お前さんの力は何だつてさ。隙をついてお前さんを投げ飛ばした時を考えたら　殴りあいには並以下だろうさ。ならお前さんの動きは　」

咲夜は唾を飲み込む。肌着を濡らす汗が忌々しい。この男は危険過ぎる。

「時間を止める…かな？まあ、どうでもいい。無礼な人間にはやり方ってものがある」

咲夜は驚愕する。能力を言い当てられたからだ。種の割れた手品は滑稽だ。完璧で瀟洒と言われたメイドは、今や丸裸のただの女となった。

一步、また一步と次郎が咲夜に近づいてくる。咲夜はじりじり後退り、敷石につまづき尻餅をついた。

「やつ…やめっ…たすけっ…」

咲夜に翳される次郎の手、彼女は思わず目を閉じた。抗う気も失せるほどこの場は次郎が支配してた。

「なんてな？」

「へっ？」

にやりと笑った次郎が、咲夜の頭をポンと叩いた。咲夜は鳩が豆鉄砲を食らったような顔で惚けている。

「なんでお前さんの主が俺を呼んだかは知らない。ただな、無礼はいけない。少なくとも理由を聞けば俺だって考える。と言う事でお仕置きは終了って訳だ。んっ？」

けらけらと愉快そうに笑う次郎に、拗ねたような顔で咲夜は不貞腐れた。

「貴方は「次郎」……次郎さんは酷いです。主より怖かったですわ」

「ま、そういうな。取り敢えずはすっきりしたからいい。んじゃ俺は屋台があるから出掛けるわ。咲夜…だっけな」

そういつて腰を上げた次郎に追いつがる咲夜。

「あ、あのっ……」

「ん。どっちにしろ今日は無理だが、明日の晩でも出向くから迎えに来てくれ」

「はい、必ずお迎えにあがりますわ。それと……今日は大変ご迷惑をおかけしました」

咲夜は素晴らしい姿勢で頭を下げた。そこにいたのは完璧で瀟洒なメイドそのものだった。次郎は手をひらひらしながら庭を出ていこうとしていたが。

「そうだ。お前さんの主に今日掘った里芋、持ってってくれ。今日行けなかった詫びだ」

咲夜は頭を下げたまま、「はい」と答えた。

今宵の月も鮮やかだった。幻想郷の秋は深まる。

登場人物

屋台の店主、次郎

栗を持ってきた妹紅

完璧で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

咲夜の主



## 礼儀の妙（後書き）

咲夜さん登場。別に嫌いな訳じゃ無いです。むしろ好き。ただ、好きな子は虐めたくなるだけです。

つか東方で嫌いなものってムカつく二次設定な八雲紫くらいです。うちの紫は可愛く書きます（笑）

今後は各陣営とまったり絡ますつもりですが、今回紅魔館まで行けなかったのが残念です。

可愛いおぜうを書きたかったのに。

うー 的なおぜうは書かないけどネ。やはりおぜうにはカリスマ（笑）は必要です。

では次もまったり頑張ります。

夜に生きる者（前書き）

おおしげ

## 夜に生きる者

「なあ次郎、お前は何考えているんだ？もう少し里の人間と交わったらどうだ？今のままじゃ皆がお前を気味悪がっている……」

手酌で日本酒をやりながら、里の顔役である上白沢慧音が諭すように言う。

「ふむ……慧音、お前さんは俺をどう思ってるんだい？」

相変わらず面倒臭そうに話す次郎。彼もまた手酌でやりながら、自慢のキセルでぶかりと煙を吐く。

「いやっ、私はその……好きだぞ？次郎が……」

何を血迷ったか慧音は頬を真っ赤に染めた。

「だってよ？妹紅」

「へっ？」

気が付くと慧音の後ろにはいつの間にか妹紅が立っていた。その表情はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「……慧音、私との事は遊びだったんだな。不毛な女より、やはり男のぬくもりが堪らないんだね？どうしよう次郎？遊ばれちゃったよ私……」

ぶるぶると肩を震わせ顔を伏せる妹紅。

「慧音、お前さん教育者のくせに両刀使いか……この外道が……」  
追い討ちをかける次郎。

「いや、そんな……ちがつ……私はそんなふしだらな真似はっ……妹  
紅！私は軽い気持ちでお前のそばに等……なんで二人とも笑ってる  
！？」

次郎と妹紅は声にならない笑い声で震えていた。いや、むしろ痙攣  
していた。

「いやあ慧音よ。お前さんはからかい甲斐のあるヤツだな？くくく  
っ」

「慧音えお腹痛いっお腹いた〜い……くふっ……」

涙すら流しながら笑い転げる二人だった。

「貴様ら……乙女の純情を弄びおって……許さん」

今の慧音はまさに阿修羅。背後に怒りのオーラを纏っている。

「ちよっ……慧音っ……冗談だつて、ね？」

「そ、そつだぞ？ちよつとしたお茶目だ。ほら、そんな顔したらお  
前さんの可愛い顔が台無し」

「黙れお前らあ！指導お！指導お！」

激しい炸裂音と共に、慧音の頭突きが二人を襲う。

「洒落に…なら…ん…」

「不死身でも…痛いものは…痛…い…」

無様に崩れ落ちる二人だった。慧音はどっかと座り込み、深酒を決め込んだ。幻想郷の夜はこれからだ。

### 東方御伽草子

騒がしい客で溢れる次郎の屋台は、今夜も繁盛していた。相変わらず妖し相手の商売であるが、この表情豊かな人外達が次郎は好きだった。

「鈴仙、今日は師匠のお使い帰りか？」

先日の一件から、永遠亭の住人である月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバは「喰いものや」の常連になった。

「お使いって子供じゃないんですから！お仕事の帰りです！」

「そうかそうか。ほら、甘い卵焼きだぞ」

「わっ、甘い、美味しいです次郎さん！」

ぴーんと優曇華の耳が伸びる。余程気に入ったらしい。

「……………子供じゃねえか」

「むう……………いいんです！卵焼きに罪は無いんです！」

兎の鈴仙は頬を膨らませながらも卵焼きを頬張る。毎度毎度次郎にからかわれながらもやってくるのは、存外このやり取りを気に入っているのだろう。

「すねるな。ほれ、お茶」

「……………ありがとうございます。ふう、ふう、あちち……………」

鈴仙は下戸だったようだ。

「ジロ！この樽でいいの？」

「お、ご苦労さん。それで大丈夫だ。裏に賄い用意してあるから喰いな」

「ありがとうジロ！間違わず持ってこれるあたいたら最強ね！」

「おっおっ最強だぁ。とっくと飯食ってこい」

「ふふ〜ん」

そういつて突然現れた青く小さな妖精は消えていった。

「あれっ、次郎さん今の小さいのは妖精ですか？」

きよとんとした鈴仙が驚いたように言う。

「……ああ、あれは一応従業員なんだ。チルノって言ってな、妙に懐かれちまったんだ。毎日のように自宅に突撃してくるから、上手いこと言い含めて従業員にしたってわけだ」

なんだか疲れたように次郎は語る。人に言えないようなエピソードがあるらしい。

「こういつてはなんですが、計算とか任せたら……」

「……はあ……言うな」

「が、頑張つて下さい！次郎さん！」

憐れんだように鈴仙は次郎に声援を贈った。妖精があれなのは幻想郷の常識らしい。

「ありがと鈴仙、そういつてくれるのはお前さんだけだ……よし、その耳で癒しておくれ……」

「へっ？、いやっ、じじじ次郎さん！？そんな破廉恥なっふわわわわわわ……」

有無を言わず鈴仙の耳をいじり倒す次郎に、真つ赤になりながらもどこか諦めの表情で鈴仙は触られている。一番奥の席に座っていた慧音と妹紅がそれを生暖かく見ている。慧音が若干悔しそうなのが謎であった。今宵も食いもんやは繁盛している。その時

「次郎様、お迎えに参りました」

客からは陰になる柱の横に、完璧で瀟洒の二つ名に違わない紅魔館のメイド長、十六夜咲夜が完璧な礼で次郎を見ていた。彼は小さく頷くと、手早く土産替わりの惣菜を包み、前掛けを外した。そして裏でもぐもぐと賄いをパクつく従業員を一瞥し、深いため息をついた。

「……慧音、妹紅、少し出てくるから店番頼めないか？今日の飲み代タダにしてやるから」

「やるっ！」「」

次郎の言葉が終わらないうちに二人は満面の笑みで答えた。現金な物である。

「チルノ、出かけてくるから飯食ったら今日は上がっていいからな」  
頬をぱんぱんに膨らませているチルノは声を出す事は叶わず、必死にこくこく頷いている。

「じゃ行こうか咲夜」

そうして二人は、静かに闇に溶けていくのだった。



次郎は一度自宅に戻ると咲夜を表に待たせた。暫くして次郎が現れると、彼女は控え目に嘆息した。それは、次郎は黒いタキシードに花束を抱えていたからだ。そして次郎は土産をお重につめ直し、鮮やかな紅色の風呂敷に包んだ物を咲夜に持たせると、彼女に行くぞと促した。但し花束だけは大事そうに抱えたままだ。

「……………次郎様、どうしてお召しかえを？」

咲夜の問いかけはある意味当然と言える。彼女が見た次郎と言う人物は、顔立ちは端正であるが、寡黙で融通の利かない御し辛いと言う印象だからだ。その上腕っぷしは咲夜を軽く捻る程である。彼女がいつもの如く、力技で言う事効かせようとした結果は、彼女自身が自信を消失する程の手並みであった。ならば、客人の礼を欠いた咲夜とその主であるレミリアに対して良い印象を持たないと思うのが自然だ。

「ん？お前さんもおかしな事言うね？せつかく招待されたんだ、汚い格好で行けないだろ？」

何を馬鹿な質問をと言いたげな表情で話す次郎だった。

「で、ですが、昨日私は次郎様にご無礼を働きましたし……………」

「はあ…お前さんも面倒な性格してるねえ。確かにお前さんは無礼だった。けどまあ、そいつはきちんと落とし前ついただろ？ならもう手打ちでいいだろうさ。少なくとも俺は、紅魔館とやらに行くのを楽しみにしてるんだぜ？」

そついうと次郎は片目をつぶってみせた。

「分かりました。でも、やはり昨日は申し訳ありませんでした。これ以上は申しませんが、今一度言わせて頂きました。それと、あなたにウイソクは似合いませんわ？」

次郎の言葉に一瞬笑顔を見せた咲夜だったが、すぐに表情を消すと皮肉で返してみせた。どうやらわだかまりは消えたようだ。二人は連れ立って闇夜の空に浮かんで消えていった。

夜空を並んで飛んでいく二人に、霧に噎ぶ湖の畔に立つ洋館 紅魔館が見えてきた。次郎はモノトーンの景色の中で唯一自己主張をしている紅き洋館に、思わずほう、と嘆息した。それを横目に咲夜は誇らしそうに胸を張った。控え目に、であるが。

次郎がここまでの道すがら、咲夜に説明された紅魔館とは、吸血鬼であるスカーレット姉妹と、姉で館の主であるレミアアの親友、パチュリー・ノーレッジ、門番の紅美鈴、そしてメイド長である十六夜咲夜が住人として住んでいると言う。

紅魔館には地上の居住部分と、とある理由で部外者は近寄れない地下部分があり、そしてパチュリー・ノーレッジが書齋のように住まう大図書館と言うエリアがあると言う。

これらの説明を咲夜が次郎にしたのは、客人である彼の安全の為だという。というのは紅魔館に住まう住人全て”少々”気難しい者達であり、客人と言えど普段のペースを変えない住人の気を損ねると無事に済まない懸念があるからだと言うのだ。

普通に考えればおかしい話なのであるが、それが通るのが幻想郷と言ふ事なのだろう。因みに咲夜が紅魔館のメイド長として、名実共に全てを取り仕切っていると云う件りでは、無表情な彼女には珍しく得意気な表情で語って見せた。

紅魔館の門前に降り立った次郎は、正面にある立派な時計塔を一瞥し、視線を下ろした。そこには館を取り囲む鉄柵によしかかり、腕組みしながら立っている美麗なる赤毛の女性が居た。

咲夜によると彼女が門番である紅美鈴であると言う。彼女は素晴らしいスタイルの持ち主で、顔立ちも秀麗である。鶯色のロングドレスのような出で立ち、腰まで切れ込むスリットは戦闘の際の機能性の為だろう。頭にぼんと乗せられた帽子が、彼女の中の可愛さを引き出しているようだ。

「……………行きますよ」

微動だにしない美鈴をじつと眺めていた次郎に、咲夜の何故か不機嫌そうな声が飛ぶ。

「……………ああ」

次郎は頷いて正面玄関へと歩を進める。ふと後方から「さ、咲夜さん、ねね寝てはおりませんひぎゃあ！！！！？」等と言ふ悲鳴が聞こえた気がした次郎だったが、敢えて気にしない事にするのだった。理由はとばかりは嫌だからだ。

そうして二人は館に入り、外観からは想像もつかないほどの長い廊下を進んでいく。やがてそれも終点となり、重厚な木目の扉の前に次郎は立った。咲夜は次郎を制し扉に声をかける。

「お嬢様、お客様をお連れ致しました」

「……お入りなさい」

咲夜の声に、凜とした館の主であろう女性の声が響いた。

「次郎様、中へどうぞ。主がお待ちです」

咲夜が扉を開き、腰を曲げる。次郎は広間を進み、正面の玉座に座る少女の前に立った。

アンティーク調の木製の玉座に座る紅魔館の主、レミリア・スカールレットは美しかった。ブルーサファイアの髪、血の色のような深紅の瞳、桃色の薄い唇から見え隠れする鋭利な犬歯。少女のような体格とは言え、その身からあふれ出る覇気は、流星に館を束ねる者の威厳に充ちている。そのアンバランスさが逆に彼女の妖艶さを引き立てている。

「よく来たわね、歓迎するわ？人間。私がこの館の主、レミリア・スカールレットよ」

レミリアは次郎の目をじつと覗き込みながら淡々と言う。次郎はそれを真正面から見返し、意味ありげに微笑すると軽く会釈した。

「ご招待頂きまことに感謝します。ご所望頂いた人間でございます。こちらは庭に咲いた名も無き花です。それではさようなら、吸血鬼

のお嬢さん」

次郎は張り付くような笑みを絶やさぬまま、花束をレミリアに渡し、さり気なく鼻で笑うと踵を返し出口を目指す。戸口に控えていた咲夜が青ざめた表情で次郎を見ている。

レミリアは非常に困惑していた。

彼女は人里で一際有名な人間、次郎に興味を抱いていた。それはこの幻想郷と言う異質な空間で、殊更異質な妖し相手に堂々と商売をする人間を見てみたいと願ったからだ。

彼女は孤独だ。パチュリーと言う親友はいるが、それ以外に彼女と対等に話せる友人などいない。

吸血鬼と言う種族は長命　いや、その身は既に生命活動を維持していない以上、魂と肉体が朽ち果てない限り不死である。だが、永遠を生きるとは孤独であると言う事と同義である。

見知った者は何れ死に別れる。それ故に孤独なのである。彼女は齢五百才を越えた辺りだが、既にいくつもの別れを経験している。

だからこそ、彼女から見て刹那の年月しか生きれない人間にある種の羨望を感じるのだ。短い人生ながら、濃密な生涯を必死に生きるそれは長命種には出来ない事なのだ。悠久を生きるために希薄になる生き方。それは仕方ない事なのだ。だからこそレミリアはそんな人間の話を聞きたいと願うのだ。

だがレミリアは誇り高き吸血鬼であり、この紅魔館の当主である。まして吸血鬼にとって人間とは食材である。持ち前のプライドの高

さと、捕食者が非捕食者の人生に興味を持つと言うジレンマ、それがレミリアの態度に露骨に出てしまったのである。

彼女は次郎の瞳を覗き込み、吸血鬼の特性である”魅了”の魔法を使い、彼を傀儡にしようとした。だが、彼には一切の効果も現れなかった。魅了の魔法はいかに対象の精神力が強くとも、魔法に耐性かなければ抗う事は出来ない。

しかし次郎には動揺する素振りすら見せなかった。故にレミリアは困惑する。

「ま、待ちなさい！無礼は許さないわ、人間！」

思わず飛び出したレミリアの罵声、それは本心と言うよりは狼狽からでたものかもしれない。しかし戸口で足を止め、振り返った次郎の顔を見たとき彼女は後悔した。何故なら彼の顔になんの表情も浮かんではいなかったからだ。

レミリアの心を支配したのは恐怖。見知らぬ者を見たときに浮かぶ潜在的な恐怖だった。吸血鬼を前に平然と我を通す人間を彼女は知らない。

「吸血鬼のお嬢さん、俺は見せ物じゃあ無いんだ。俺が招待に応じたのは、お嬢さんの面子を潰したと感じたからだ。だがそれは俺がここに来たことで義理は果たしたはずだ。お前さんは俺を人間と呼んだ。だから俺はお前さんを吸血鬼と呼ぶ。礼を尽くせない人間関係に発展は無い。だから俺は帰るだけだ。気に入らなければ殺せばいい。だが俺は死んでもお前さんには屈伏しない」

次郎はつかつかと玉座に歩み寄り、レミリアの耳の横に荒っぽく手

を突き、接吻せんばかりに顔を突き合わせたまま言い放った。

レミリアは人間ごときに圧倒された屈辱感と同時に、この物怖じせず自分に道徳を叩きつけるこの偉そうな人間に好意を抱くという相反する感覚に混乱をしていた。目が泳ぐ。だが目は離せない。これは一体なんなのか？レミリアは恐慌に陥った。

咲夜ははらはらと経過を見ながらも、何故か次郎を止めなかった。いや、止めてはいけない気がしていた。自らの名付け親にして愛しい主、その人の為に敢えて静観するという選択をしたのだ。

「……さい……」

鼻先が触れ合う距離感の中、レミリアはじつと次郎を睨みながら何かを呟いた。

「……なんだって？」

首をかしげながら次郎がさらにレミリアを睨む。

「……るさい……」

レミリアの瞳は最大に開かれ、やがて何かが盛り上がり、そして零れる。

「……るさい！うるさい！うるさい！うるさい！何よ人間のくせに生意気よっ！何さ！と、と、友達になりたいだけなのに怖い顔してっ！何よ！何よ！」

ぼたぼたと涙を零しながらレミリアは絶叫する。次郎は一瞬たじろ

いだ表情をしたが、すぐに無表情になると彼女に話しはじめた。

「咲夜に持たせた芋は食ったか？」

「……………??…美味しかったわ？」

「じゃ感想を言ってくれなきゃ寂しいだろうが」

急に穏やかな口調になった次郎に困惑するレミリア

「今日は色々調理したのを持ってきたんだ。楽しみか？」

「う、うん、楽しみ…かもしれない」

二人の背後で咲夜は主の愛らしさに必死で笑いを堪えている。

「この花は喜んでもらえたかい？」

「え、ええ、素敵よ」

「俺の名前は次郎」

「私の名前はレミリア」

「素敵な名前だな。レミリアに似合っている」

「あ、ありがとう…」

咲夜は笑いを堪えているのが困難になり、自らの能力で刻を止めると、声を上げて笑い転げた。完全に手玉に取られおろおろする主。



あんなレミリアを見たのは初めてなのだ。咲夜は次郎に自由にさせて正解であったと思った。あの尊大で自尊心だけが高い、協調性の欠如した主の成長の為に。そして刻は動き出す。

「何か言うことあるか？レミリアお嬢様」

次郎が初めて自分の名を呼んだ！レミリアは許されたのかもしれないと安堵する。今や自尊心はどこかに消えていた。

「ご、ごめんなさい次郎……ただ友達になりたかったの……でもやり方がわからなくて、ごめんなさい次郎、ごめんなさい」

つい、と次郎の親指がレミリアの涙を拭いた。体温がほとんど無い彼女の涙は冷たい。

「じゃ、仲直りだな。俺も恐がらせてごめんなさい。レミリア、今度店に来てほしい。」友達”だからな、次は俺が招待するよ」

すっ、とレミリアから体を離し、次郎は彼女の前に胡坐をかいて座った。背の高い次郎が、彼女の視線に合わせたのだ。

「ありがとう次郎。招待は喜んで受けるわ。だって……友達なものさういってレミリアは伏し目がちに笑った。心からの笑顔に次郎も笑った。

「じゃ、また遊びにくるな、レミリア」

軽く手を振り腰を上げる次郎。

「ええ、必ずまた来てね次郎。お店も必ず行くから」

そうして二人は晴れて友人となり、この不思議な夜会は幕を閉じたのだった。

玄関で咲夜が感謝を示し、そんな彼女に「お前も友人だろうか？」との次郎の返しに酷く狼狽したのはまた別の話である。

次郎は頭に何故かナイフが刺さった門番を一瞥し、闇の中に消えていった。

屋台に戻った次郎は絶句した。

「なあ、これはどういう事だ……」

呟いた次郎に答えるものは誰もいない。何故なら店を任せた二人とチルノ、胡散臭い魔法使いにろくでなし巫女、角を生やした鬼の幼女が意識を無くして倒れているからだ。

次郎は深いため息をつき、改めて倒れ伏した馬鹿野郎共を見やると更に深いため息をついたのだった。

次郎は全てからになった酒樽に座り、こいつらをどっつやって痛め付けるか思案するのだった。

## 登場人物

紅魔館の当主、レミリア・スカーレット

完全で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

レミリアの妹

紅魔館大図書館の住人、パチュリー・ノーレッジ

紅魔館の門番、紅美鈴

人里の顔役、上白沢慧音

慧音の親友、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

霊夢と言う名のろくでなし巫女

喰いものやの従業員、氷精のチルノ

角を生やした鬼の幼女

## 夜に生きる者（後書き）

裏設定として、次郎はこの幻想郷で生きてくには充分過ぎる能力を有しています（詳しくは前話）

ですが彼は戦闘も弾幕にも関わりたくない普通の人間です。が、自衛のためには行使することを躊躇しません。

前回は咲夜を圧倒し、今回はおぜうさまを圧倒しました。

次郎の能力は「付けたり離したりを操る程度の能力」です。これは解釈次第ではいかようにも幅が広がる汎用性溢れる能力です。

咲夜のナイフを切り、レミリアには魅了の魔法の効果を切って見せた。

レミリアが本気で殺しにかかれば次郎も危なかったでしょうが、礼を重んじる次郎の気迫に場は支配され、おぜうさまは自分を見失いました。

ま、そんな感じですよ。

次郎は異変には関わりません。それは博麗の巫女の仕事だからです。次郎は酒場の親父として巫女からその話を聞くことはあれど、関わりはしません。能力があれど酒場の親父に過ぎないからです。

さてこの駄文ですが、興味がある方は感想を頂けると嬉しいです。  
あと、自分の嫁出してとかの要望も受け付けます。

では

ナナツボシ

## 風邪っぴきとは心細きもの

何やら外が騒がしい。昨夜も相変わらず寝たのは朝方だ。雨戸から射し込む朝陽の加減を見ると、どうやら二時間も眠れていないようだ。

昨日は山ほど焼いたから、今日はパンを焼く事も無いし。畑は白菜を植えおわった。つまり、寝坊しても問題無いのだ。だから現在何者かがしつこく叩くノックは無視しよう。そうだ俺は何も悪くない。それでは皆様さようなら、お休みなさい……。

「起きろ次郎っ！……！」

うるさいな、俺はまだ眠いんだ。ほっといてくれ。

「起きろってば！」

しつこいな。誰だよ馬鹿野郎。俺は夜中まで働いてた労働者なんだよ。勘弁してくださいよこの野郎。そうだ、こいつも寝かせてしまえばいいのだ。所謂共犯者に仕立ててしまえばいいのだ。えいつ……。

「ちよつ、次郎、やめつ、何するっはあう、朝から破廉恥うああ……」

むむっ？何やら柔らかくいい匂いだな？むっ？むむっ？凄まじく柔

らかいな。これはいい抱き枕だ。むしろ顔を埋めたい、いや埋めよう……。

「ひゃうん！ やっ、じろ、やめっ、だめええ！ 助けてもこーーー！ っ！！！！！！」

なんだよ五月蠅いな。俺はこの素晴らしく柔らかい枕は離さないぞ。断固拒否だ。む、また誰か入ってきやがった。だが俺は意地でも起きないぞ！

「どうした慧音？ って次郎何やってんだ！ 何て羨まし…ちがっ…慧音変われ…じゃなくて、起きろっ！」

「ギヤアアアアア！」

ギヤアアアアア！

「私まで燃やすな妹紅！」

殺す気か妹紅！ 起こすのに妖術使うな！ だが、悪いがこの枕は離さないからな！ 絶対に！

「……次郎、よく見ろ…その枕は何処にある……」

何処って慧音……枕は……むっ？ 胸ええ！？

「そうだ、私の胸だ。よくも好き放題揉みしだいてくれたな……。妹紅は自分の胸見ないっ」

俺が慧音の胸を揉む？





で済むかあ！！！天誅うううっ！！！！！！」

そうして俺は慧音の頭突きで、物理的に二度寝へと移行したんだ。

### 東方御伽草子

「お前ってやつは本当にどうしようもない奴だ。いくら寝呆けていたとは言えだ、曲がりなりにも乙女のむ、む、胸を揉みしだくなんて常識の欠片も無いぞ？」

私のこの豊満な胸に興味を持つなどは言わない。だがな？親しき仲にも礼儀ありと言うじゃないか？ならば、私とお前の仲だとて、やはり段階を踏むべきなんだ。分かるだろう？男女の手順とはこうあるべきと言う段階の事だ。そ、その、わわ、わたっ、私を好きだ等の告白をだな、経てから閨を共にすべきなんだ。そうとなれば私も鬼ではない。むしろ吝かでも無いと言うかそのう……。だあゝ！！つまり、いきなり不埒な真似はいけなめと言う事だ！分かったな？次郎！！」

現在、次郎の自宅の居間では、ぼろぼろに焼け焦げた寝間着姿の次郎が巨大なたんこぶを拵えて正座していた。そしてその前に慧音が座り、既に小一時間は説教をしている。妹紅はいい加減飽きてしまったのか、勝手に茶筴筒を開けて茶菓子を食べていた。

「なあ、慧音。俺は今、お前の胸を寝呆けて揉んだ件で怒られているんだよな？あれ、間違ってるか？」

ぐったりとした顔の次郎は、かなり面倒臭そうに言った。

「そうだった！お前の破廉恥な所業を咎めてるんだ」

何やら偉そうに頷きながら慧音は言う。

「と言う事はだ、お前さんの話を纏めると……いきなり揉むのはいけない。だが、手順を踏めば問題ない。この場合、俺が慧音を好きと言う意思表示をしたなら問題は発生しない。そう聞こえたぞ。なら言おう、俺はお前が嫌いじゃないし、むしろ好きだ。だから好きだけ揉ませてくれ」

次郎は真顔で言い放つ。

「なななななっ！！何を言うのだお前はっ！！すすすっ好きとか言うな！ははっ恥ずかしいじゃないかっ！！！！」

瞬間湯沸器のように一瞬で赤面した慧音が慌てふためき後ずさる。

「なあ妹紅、俺、変な事言ったかなあ？」

「ん〜？別に变じゃ無いでしょ？慧音の説教とやらのままだったぞ。と言うか次郎さん、私はどうだ？髪は白いが中々の器量よしだと思っけど」

話を振られた妹紅は、にやにやしなから次郎にしなだれかかった。

「確かに妹紅は美人だな。そういう観点で考えたら、なるほど、吝かではないな」

次郎は腕組みしながらうむうむと頷く。

「妹紅……私に喧嘩を売っているようだな」

「慧音、どさくさ紛れに抜け駆けしたのは誰だ」

何やら次郎を挟んで不穏な空気が辺りを包んだ。

「表へ出る！妹紅」

「後悔するなよ慧音」

不敵な笑みを浮かべた二人は、油断無く睨み合いながら外へと消えるのだった。

「……………で、一体何しに来たんだよお前ら」

次郎の呟きが虚しく響くだけだった。

ずずず……、静かな居間に茶を啜る次郎がいた。寝起きの濃い緑茶は目覚めを豊かにすると彼は考えている。ただ、外に生きていた時は根っからのコーヒー党だった次郎は、幻想郷に豆自体中々流通しないのが不満と考えていた。

「いつそ八雲にお願いしてみるかねえ……………」

栓のない眩きを溢し、苦笑いをする次郎であった。

「呼んだかしら？次郎様？うふふ……」

気が付くと次郎の背中に寄りかかる八雲紫がいた。

「お前さん、驚かすんじゃないよ。ったく、今朝はろくな事がないうふつ、八雲の、何か当たってるぞ」

「あててるの。やあね、次郎様ったら野暮はいいつこなしですよ」

「……阿呆が」

朝っぱらからそんな艶っぽい空気を醸し出していると　がらりと居間に通じる障子が開き……。

「ぐはっ……次郎さん……私が勝ったぞ……」

さらに

「ぶほっ……口惜しや……次郎……私は……諦めな……がくっ……」

血塗れの妹紅と慧音が這うように飛び込んできた。

「次郎さん、私に、勝利のご褒美を……」

吐血しながら次郎に手を伸ばす妹紅。血の涙を流して悔しがる慧音。そして渦中の次郎は……。

「血塗れの方はちょっと……ごめんなさい……」

「「がくつ……」」

二人は意識を失ったのだった。

「次郎様、これは一体なんなのかしら？」

余りの惨劇に呆れ顔の八雲紫が言う。

「いや、なんかしら用があったらしく、さっき叩き起こされたんだ。そして気が付いたら二人で喧嘩をおっぱじめたって訳だ」

「で、用って何かしら？」

「さあ……」

首をかしげる次郎と八雲紫であった。

「そういや八雲の。ときにコーヒーは手にはいらんかな？最悪苗でも構わないが、とにかくコーヒーが飲みたいんだ」

「そうねえ、人里の道具屋で極極稀に見かけるけど、幻想郷では栽培してないわ。うーん、コーヒー位なら何とかするわ」

「すまん。礼は何でもするさ。コーヒーの為だ」

「うふふ……じゃ、どんなお礼を貰うか考えておくわ？楽しみねえ」  
妖艶な笑みを浮かべる八雲紫に、思わず失言だったかと肩をすくめる次郎であった。

ややもして、八雲紫はとうに帰り、太陽は随分と登った。次郎は七杯目の茶を湯呑みに注ぎ、煙管に五回目の葉を詰めた。

「お前さんら、そろそろ起きないかね？」

呆れ顔の次郎が仲良く気絶している二人に呼び掛けた。

「「はっ!?!」」

「やっと起きたか……」

むくりと起き上がった二人は惚けたような顔で座っている。

「ほら、渋い茶だ」

「すまない」

「ありがと次郎さん」

しきりに首をかしげながら、次郎が出した茶を啜る二人。きっと先ほどの出来事を忘れているのだろう。次郎はしてやったりである。

「で、結局何しに来たんだお前さん達は」

「む、なんだっ……!?!?…そうだ次郎、博麗の巫女が風邪で倒れたらしい。薬は飲んだらしいが、何せ懐が寒過ぎて餓死しそうだと言う。すまぬが次郎、何か滋養に良いものを届けてはくれんか?何分私は

里を離れられなくてな……」

慧音が済まなそうに言う。確かに半妖の人里の顔役である慧音が、長い時間里を離れて何かあれば大事である。

「あのろくでなし巫女か……まあ、いいさ。つけも溜まつてるし様子見がてら行つてくるわ」

面倒くさそうに言う次郎だが、結局行くのが彼の奥床しさなのだろう。そうして散々大騒ぎした二人は仲良く帰って行くのだった。

次郎は思案する。博麗の巫女の事だ。彼女は次郎の店で飲み食いをするが、実は一度も支払いをした事は無いのである。たまに「次郎さん、お代は入れておいたから」と言いながらそそくさと帰っていくが、後から釣り銭箱を覗くと、そこには「博麗神社」とかかれた御札が入ってる。

初めて博麗の巫女が店にやってきた時の事を思いだし、次郎は思わず吹き出した。彼女が次郎に言った言葉とは

「ねえおじさん。私は博麗の巫女よ。お腹が空き過ぎて倒れそうなの！これも全て誰も賽銭箱にお金を入れてくれないからよ！だからおじさん、賽銭がわりに何か食べさせて！」

と、偉そうに彼女は宣った。その余りの言い分に次郎は腹を抱えて笑い、なら賽銭をくれてやると飯や酒を振る舞った。以来彼女は味



を占めたように通ってくる。最も、時折八雲紫が彼女のつけを払っていくのだが、巫女はそれを知らない。

とにかく次郎はこの破天荒な巫女を気に入っていた。八雲紫に聞いた話であるが、彼女は時折起こる”異変”と呼ばれる幻想郷の危機を解決し、外界と幻想郷を隔てる結界を維持していると言う。

だが、彼女自身の能力のせいで、誰からも浮いた存在だという。つまり彼女は、過酷な義務を背負いながら、孤独を強いられていると言えるのだ。

彼女を慕い、好意を抱いている存在がいても、気が付くと最終的にどこにも属さない彼女がいるのだ。

次郎はそれに同情はしない。何故ならそれは彼女自身が選択した道だからだ。だが、自分が何かしてあげるのは自分の勝手だと考えている。だから次郎は荷物を詰める。背負いきれない程大量の荷物を。

博麗霊夢は高熱で朦朧とした視界のなか、この額の心地よい冷たさはなんだと考えている。さらに脇の下にも冷たい手拭いがはさんであり、昨夜のような辛さは減った気がしていた。取り敢えず、眠ろう。何も考えたくは無いから。

「お腹すいた……」

彼女はふと目が覚めて思わず呟いた。なにせ彼女は昨夜から何も口にしてないのだ。

「食欲あるか。待つてな？」

彼女は何か聞こえたような気がしたのか、視線を左右に動かしたがやがて力尽きたように目を閉じた。

「おい、おきろ」

彼女の肩が軽く揺すられる。ゆっくりと目を覚ました霊夢の視界に次郎が映った。

「なんで…いるの？次郎さん……」

まだ熱が引かないのだろう、霊夢は荒い息をしながら目の前の次郎を見つめる。

「黙れ病人。口あける」

「なによっ…あむっ……やだ、おいし」

「擦った林檎だ。のど越しが気持ちいいだろ？」

何だか騒ぎそうな霊夢の口に、有無を言わず匙を突っ込む次郎。

「もすこし…たべる」

「そうか、食べる」

静かな和室に霊夢の咀嚼音だけが響く。彼女の視線は相変わらず次郎を見ないが、表情に陰はない。孤独を好む霊夢だとて、風邪で臥せていれば心細いのだろう。静かな時間だけが流れる。

「なんか、お父さんがいたらこんな感じなのかもね……」

ふと霊夢が呟いた。

「そつかも知れないな。俺は早くに両親と死別したから記憶には無いが、きつと親の温もりとはこういう時に感じるのかもな」

外の景色を物憂げに見ながら次郎は語る。 霊夢の呟きは次郎の内面にある記憶を探る引き金になったようだ。

「私も両親の記憶は無いんだ。そつか、私たちは似た者同士だね、次郎さん」

霊夢は初めて次郎を真っ直ぐ見ると、少しだけ笑った。

「ねえ次郎さん。外に帰りたいつて思ってる？」

次郎は暫く思案する。

「いや、俺の居場所はここにある。屋台があつて、毎日似たような奴等が騒ぎに来て、その中に俺がいる。この先どうなるかなんて想像はつかないけれどな。でも俺は約束したんだ」

次郎は微笑し、霊夢を見た。その目は彼女が初めて見る優しい目だった。

「約束？誰に？」

「今は心の中にいる妻と、産まれてくる筈だった子供にさ。俺は幻想郷に来る迄、いや、来てしばらくは生きる事が地獄だった。神さえ呪ったよ。けど、幻想郷は優しくてなあ……いつの間にかちゃんと生きてみようと思ったんだ。ここで幸せになりたいって思ったんだ。……喋り過ぎたな。誰にも話してないんだ。内緒だぜ？」

次郎は照れたように笑った。

「へへ次郎さんにそんな歴史があつたんだ。風邪ひいてなんか得した気分よ。でも、心細かったから話し相手になつてくれてありがとう……」

照れ臭いのか、布団で顔を隠す霊夢だった。

「さて、少し元気になったな。うどんか卵粥どっちが食べたい？」

「うどん！」

「ようし待ってる。俺が台所いつてる間に着替えておけよ？流石に着替えは出来なかったからな」

「うん、わかった。おとーさん」

「……阿呆が」

こうして次郎は霊夢の熱が下がるまで甲斐甲斐しく世話をし、翌朝帰っていった。人は誰しも床に臥せれば心細いもの。それは博麗の巫女も例外では無かったようだ。

幻想郷のとある一日の出来事は、緩やかに優しく過ぎていったと言  
うお話。

登場人物

博麗の巫女、霊夢

騒がしき隣人、上白沢慧音

騒がしき隣人、藤原妹紅

妖艶な隙間妖怪、八雲紫

## 風邪っぴきとは心細きもの（後書き）

なんか慧音妹紅の絡みが恒例になりつつある今日この頃、なんかこの二人好きなんですよね。

どうやら二人は次郎が気になるようですが、次郎はじゃれあう二人をからかっているだけなのかな？作者も知りません。

今回は霊夢が主役でした。シニカルな巫女の弱っている感じを書いてみました。カッコいい霊夢は皆さんの作品にお任せして、僕はひたすら日常のみです。

博麗神社に向かう途中、ルーミアに出会う話を書こうかな？とか思いましたが、それもまた皆さんの作品にお任せしました。そーなのかー。

次郎にヒロインが出来るとしたら一体誰なんだろう？いないか。キャラがオツサンだし。

時間はどうしよう。

白玉楼か永遠亭あたりの誰かを書こう。そうしよう。

## 酷く迷惑な客（前書き）

もこたん、脇役から一気にメインキャラ昇格か！？

## 酷く迷惑な客

「なんか納得いかない……」

次郎は呟いた。どうしてこうなったとも感じていた。とにかく彼は人生とはげにも不条理なものよと齒噛みした。

なぜなら……

### 東方御伽草子

次郎は現在途方に暮れていた。その原因は目の前でその可愛らしい顔をさらに素晴らしい角度に曲げ、女性の表情を最大限に活かす極意とも言える完成形を披露している目の前僅か30センチに接近している藤原妹紅にあった。

ある種の完成形、つまり、女性の武器とも言えるその姿とは、所謂上目遣いと言う表情である。

そもそもはこうだ。ぽかぽかしたある午前中、縁側に座る次郎は少し大股を開いてリラックサしていた。自慢のキセルをくゆらせ、相談があると現れた妹紅の話聞いていたのだ。その彼女の相談とやらの雲行きが怪しくなり、次郎が難色を示しだしたあたりで彼女は



実力行使に出たのだ。

妹紅は平安の古から生き抜いてきた手管を駆使し、次郎が一瞬目を離した隙にだ、素晴らしい速度で次郎の広げる足の間に膝まづいていた。次郎は不覚であると狼狽えた所、彼女はその白魚の如き白磁のような肌色が美しい指先を次郎の太ももに置いた。

次郎がさらに狼狽えた。次郎はこう見えて一途で一本気な性格である。亡き妻への操ではないが、男女の”そういう”やり取りとは、少々遠ざかっていた。それ故次郎は初な少年のような反応になっってしまったのである。

藤原妹紅とは元来勝ち気な性格である。何故ならばそうしないと生きていけなかったからだ。彼女が産まれた平安の世は、貴族が幅を利かせる封建社会である。男尊女卑が当たり前な社会なのである。

女は政治の道具であり、政略結婚の駒として、家と家のパイプとなる。鎌倉の世になり武家が台頭してからは、その社会システムは完全に定着し、それは近代昭和初期に至まで続いた。

竹取物語の主人公であり、現在迷いの竹林に建つ館の主である蓬萊山輝夜、所謂かぐや姫は求婚してきた妹紅の父を袖にした。その結果、彼の心情がいかなるかは今となればわからぬが、とにかく彼女の父親はやがて死んだ。

妾腹ではあったが、深く父を愛していた妹紅は酷くそれを嘆いた。その結果は輝夜に憎悪を向ける事となり、輝夜が月に帰る際に帝に残した不老不死の薬を奪い、飲んだ。

それまで美しかった妹紅は、体の色素が完全に抜け、髪は白色、肌

も白色、瞳は真っ赤になってしまった。

彼女は人の身でありながら、人ならざる姿となり、人からも妖しく  
らも忌み嫌われる存在となる。不老不死の副作用である。結果、彼  
女は人の目を縫うように生きざるを得ず、虚勢で身を固め、妖術を  
習い武装した。そして幻想郷に辿り着く迄の長い間、常に神経を尖  
らせて生きてきたのだ。

幻想郷に入ってから彼女は”ひょん”な事からある出会いを果たす。  
そう、蓬莱山輝夜との邂逅である。邂逅とは思いがけずに出会った  
言う意味である。妹紅にとっては正に寝耳に水である。月に帰った  
はずの輝夜が幻想郷にいた。

それまで生きるために必死だった妹紅の中に炎が灯った。憎悪の炎  
である。二人はすぐさま殺しあった。腕が吹っ飛び、目は抉れ、心  
臓を握り潰した。だが滑稽な事に結末は「振り出しに戻る」であっ  
た。

二人共不老不死である。つまり死ねぬのだ。いくら屍のような肉塊  
をさらそうとも、やがて時計の針を逆巻きにしたように肉体は潤い  
を取り戻す。

だが、悠久を生きるとは孤独と同義である。まして、ある事情で隠  
れ住むしかない輝夜と、人に忌み嫌われる妹紅は尚更である。

そんな二人が殺しあう際、不思議なシンパシーを感じる事になる。  
永遠の孤独の中、殺しあう時に感じた痛みが、単調で退屈で苦痛な  
時間に潤いを与えたのだ。それは発見であった。

死ねないからこそ成立する娯楽。痛みと言う現実を享受する非死亡

遊戯。二人は逆説的な友情を産み、以後、睦みあうように殺しあつた。それは自分は確かに生きてると言う事実を確かめる確認作業だった。

妹紅の憎悪とは、ある意味生きる糧だっただけであり、真の意味での憎悪ではない。本音はどうでもいいのだ。永遠の中の一瞬でしかない憎悪、それは世紀を跨ぐたびに薄れていく。ただ、希薄になる毎日を引き締める為に憎んだのだ。目的が、ただの別の手段に転化したと言う訳だ。

一番最初に輝夜と殺しあつた際に妹紅はそれを実感してしまったのだ。

以後は日がな輝夜と殺しあい、慧音と言う莫逆の友を得て、人里にも馴染んだ。妹紅は安らぎを手にしたのだ。言葉遣いは粗野であるが、心は軟らかくなった。

それでも妹紅は親しくない人間には辛辣であつた。隠れすんできた弊害と言うか、とにかく対人関係を構築するのが苦手だ。人里ですれ違う者や、物売り相手には人当たりの良い態度であるがどこかよそよそしい。要は他人に必要な以上に踏み込ませない空気を常に纏っている。

幻想郷に来るまで彼女は、日々の糧を得るために退魔師の真似事をしてきたが、刹那的には感謝されても、どこか妖しと同類に見てくる人間を、妹紅は基本的に信用していない。むしろ命を狙われたりするすらした。ならば始めから馴れ合うべきではないと言うのが彼女の処世術なのだ。

そんな彼女も慧音に出会い、変わった。慧音は良い意味でも悪い意

味でも愚直なまでに真面目だ。彼女はハクタクと言う妖しが混ざった半人半妖である。ただし、満月の夜以外は基本的に人間のなりをしている。

彼女自身、幼少の頃から人間に差別的な待遇を受け、ある意味では人間に絶望していた。だが、半分が人間の我が身である。その不安定な存在だからこそ、真摯に自分の存在理由を探し続けた。

彼女も幻想郷にたどり着き、何者も受け入れる世界で居場所を見つけた。半人半妖でありながら、人里で生きる場所を。幻想郷の人間は、彼女を真面目な人格者として受け入れたのだ。

気が付けば人里の顔役として人間を守り、教育する立場と言う存在理由を見いだした。半妖の自分を受け入れた。その事実だけで彼女は充分だった。以後、慧音は人間を妖しから守る事を自分の仕事とした。

そんな慧音はどこか冷めてる妹紅に説いた。孤独に生きるのはやめろと。

それは綺麗事だと切り捨てる妹紅に、慧音は懲りずに繰り返して説いた。時には涙を流し、時には実力行使も辞さずに。そしてある時慧音は言った。”半世紀もこうして語り合う我等は友人ではないか？少なくとも私はお前が居なくなれば悲しいぞ”と。

妹紅は暫く呆然とし、そして言った。”ならば後半世紀、お前と友人とやらをしてみるか。そうすれば真実かわかるだろう”と顔を赤らめたのだ。

慧音はお前は天邪鬼だと笑ったが、それを機に妹紅は少しだけ柔ら

かくなつたのだ。因みに半世紀経つた後に慧音が”そういえば例の答えは分かったか？”と尋ねた事がある。

その質問に対して妹紅は”例の答え？なんだそりゃ？”と慧音を呆れさせたと言う。

そんな妹紅がさらに変わる事になる出会いがあった。次郎である。

ある日妹紅は慧音と飲んでいた。すると慧音は言った。最近できた不思議な屋台がある、と。彼女曰くその屋台とは、店主は人間ながら妖し相手に商売していると言う。

そんなわけあるかと妹紅は鼻で笑い、意地になつた慧音が”ならば今から行こう”と始まつた。

実際その屋台は存在し、店主は変り者だつた。無愛想だが味は確か。妖し相手に全く動じず、異形の妹紅を見ても眉一つ動かさない。

差別しない店主の態度を嬉しく思ったが、逆に只の人間のくせにその態度はなんか癪であると妹紅は店主に絡んだ。

結果は”他の客に迷惑だクソガキ”と言い放つや、店主は妹紅に凄まじい拳骨をお見舞いした。妹紅は思った。慧音の頭突きより痛い。

そうは言つても妹紅である。頭に來た、表に出ると啖呵を切つた。弾幕ごつこだと息巻いた。結果は表に出るところか更に数発拳骨をもらい、そしてお前が悪いと慧音に止めの頭突きで騒動は終了した。

次郎との出会いは妹紅にとって鮮烈だった。彼にとっては人間も妖しも関係ないのだ。客か客ではないかだ。そして、客ならばとにかく美味しい酒を飲んでほしい。その一念だけなのである。

妹紅は次郎に聞いた。”私を見てどうおもう？”と。

次郎は答えた。”見た目は綺麗だが、激しく迷惑な客だ。頼むから静かに飲んでくれ”と。

妹紅は綺麗だの件に大いに赤面しながら、この自分をお嬢ちゃん扱いする不思議な人間の男を気に入ったのである。

この次郎の自然体な価値観は以後も変わらず、二人は今日に至るまでほぼ毎日、彼の店に通っている。因みに昼間は家にも押し掛けるのであるが。

そしてある時、妹紅は慧音に相談した。自分はどうやら次郎を好んでいるらしい、どうしたらいいかと。しかし妹紅は満足な答えを得られなかった。何故なら慧音はこう言い放ったからだ。

「その相談には乗れない。私も次郎を好んでいるらしいからだ。むしろお前が次郎を好きならば、我等は敵である」

堅物で有名な慧音が赤面しながら言ったのだ。これは真実であると妹紅は感じた。と同時に莫逆の友であるが、この戦いには負けられないとも感じた。

そして二人は誓い合った。抜け駆けはしないで正々堂々と戦うつもりがないかと。ここに二人の紳士協定が結ばれたのだ。

だが、一番の敵は互いでは無かった。最大の敵は次郎だったのだ。二人が彼の自宅に出入りするようになって気が付いたのだが、彼には何やら過去に重しになるような経験があるらしい。それと、こちらの理由が一番なのだが、とにかくあの飄々とした性格が難敵なのだ。柳に風と言つか、打つても響かぬ破れ太鼓というか、とにかく、どれだけ二人が言葉に気持ちを滲ませようと、次郎はのらりくらりと躲すのだ。

鈍感ならまだ救いがある。だが、次郎は二人の気持ちを察しながらにやにやと笑つて躲すのだ。二人からすれば子憎たらしい事この上無い。

だが最近、それにも若干の光明が見えた。同じ屋台の飲み仲間である八雲紫によると、彼は直接的な接触には弱いらしいと。具体的には胸を当てると等だ。

しかし、男女関係に非常に奥手な妹紅は悩んだ。自分には八雲や慧音のような胸もないし、冗談半分の言葉ならいざ知らず、真面目に愛を告げるなど絶対に無理だ。まともに話せやしないのは想像できるからだ。

そこで妹紅は考えた。自分の性格上、直接的なアプローチはむりだ。ならば時間をかけてやるうじゃないかと。幸い妹紅には焼き鳥の名人と言う技能がある。ならばその腕を売り込み、次郎の屋台で雇ってもらおうと。

この際抜け駆け云々はどうでもいい。だって慧音は胸があるじゃないかと妹紅は自分を正当化した。

そして場面は冒頭に戻る。

「な、何するんだ妹紅？離れる」

「いいからお願いを聞いて。ね？次郎さん」

「くっ……上目遣いとは卑怯だぞ妹紅……」

妹紅は爪先で次郎の太ももをかりかりと搔きながら、しなを作って次郎を見上げる。

「な、なんだよ相談って、早く言えよ……」

次郎、四面楚歌

「ねえ次郎さん、私を店で使って欲しい。焼き鳥焼いたり他にも色々できるしさ。ね？」

妹紅、必殺の首傾げを披露する。

「……くっ、チルノがいるし……む」

「ね？」

妹紅、太ももに頭を乗せてさらに上目遣い。

「………わかった！雇うから！離れてくれえ！！」



藤原妹紅、完全勝利の瞬間であった。

こうして人里の名物屋台「喰いものや」に新しい従業員、藤原妹紅が誕生した。

それを知った慧音は、抜け駆けであると地団駄を踏んで悔しがり、妹紅は優越感に浸ったのだが、世の中そう甘くない。

因果応報と言う言葉を妹紅は近いうちに知ることになる。

次郎はこっそり呟いた。

「妹紅め、絶対に仕返ししてやる。くくく……」

## 登場人物

押し掛け従業員、藤原妹紅

堅物で有名、上白沢慧音

かぐや姫、蓬萊山輝夜

豊満な胸の持ち主、八雲紫

憐れな子羊、次郎

酷く迷惑な客（後書き）

もこたんinしたお！

だって、可愛いから仕方ないじゃない。

## STAND BY ME

幻想郷には、いつも霧の深い湖がある。それは深い森に囲まれているためなのか、はたまた多湿な気候のせいかは謎であるが、とにかく年中霧に囲まれているのである。

森側の湖岸から見て正面に見えるのが、吸血鬼を主とした集団が住まう紅魔館であるが、霧の為に淡く浮かぶ様に見える為、その妖しさを増している。

そんな湖の付近には沢山の妖精達が住んでいる。その中にチルノと言つ氷の妖精が居た。

最近のチルノは物憂げな視線を湖に向けながら、座ったまま一日を過ごす事が多い。妖精は基本的に食事が不要無いため、狩りをしたり等の生産的な活動はしない。

ただ精霊に準じた存在なので不思議な能力を持っていたりする。例えば空を飛んだり、何かを癒したり、とにかく色々いる訳だ。

チルノは氷の妖精であるから、冷気を操ったり氷を作り出したり等出来たりする。そのせいか暑さが苦手だったりするのだが、身体が氷で出来ている訳ではないので少々ぐったりする程度である。

そんな妖精達の生態は様々であるが、共通するのは持て余す時間を楽しむ娯楽として、他者に悪戯をしたりすると言つ事だ。チルノもその例外では無いのだが、何故か最近の彼女は元気が無いのだ。

「ふう……」

今日もまたチルノは、湖畔の石に腰掛けながら、湖に向かって氷塊を投げつけたため息をついていた。

「チルノちゃん、どうしたの？一人でこんなところにいるなんて」

「そうだよ。最近チルノちゃんが一緒に遊ばないから心配なんだよ」

大妖精とリグル、チルノが仲良しな妖精仲間なのであるが、いつも元気なチルノがしょんぼりしているのが気になっているのだ。

「うん……あたかもよく分からないんだ。けど、なんかもやもやして動けなくなっちゃうんだ」

チルノは膝を抱えて顔を伏せる。それを見て大妖精達は酷く狼狽した。普段のチルノは能天気なほど明るいのだ。こんな憔悴したチルノを見るのは初めてと言っつていいだろう。

「ち、チルノちゃん、何か気になる事でもあるのかい？」

虫妖精であるリグルは、頭の触角をぴこぴこ揺らしながら聞いた。

「えと……ジロがね、パンで、おいしいって思ったの。だからあたし、嬉しいけど、ジロわかんないからもやもやするの」

大妖精達はぼかんとしている。チルノの説明は全く意味不明であり、支離滅裂だからだ。ただリグルは懲りずに繰り返し尋ねた。小一時間ばかり。そしてリグルは漸く悩みについて把握出来たのであった。

それでもまだチルノの説明は過多であり、二人は一生懸命に余計な部分を削ぎ落として理解出来たのであるが、それは余談である。

二人が理解したチルノの悩みとは 前にチルノが大妖精達と喧嘩し、落ち込んだ時、人里の人間ジロが慰めてくれた。ジロはおいしいパンをくれた上に、仲直りの魔法を教えてくれた。お礼を言いたいけど、それつきりジロを見かけない。 と言う事らしい。

「ほえ〜そんな優しい人間がいるんだね〜」

リグルは感心した。

「優しいね。でも魔法ってなんなんだろう？チルノちゃん、魔法ってなあに？」

大妖精は優しい人間の存在に驚きながら、魔法が気になるのかサイドテイルの髪を揺らして興奮している。

「うん、魔法はね、ごめんなさいの魔法だよ！」

チルノは立ち上がり、誇らしげに胸を張り言う。

「「ごめんなさいの魔法？」」

二人はチルノを見上げ、不思議そうな顔をした。二人が知る魔法とは、黒白や図書館の魔女が使う魔法の事だからだ。

「えと、勇気をだしてごめんなさいと唱えたら、仲直り出来るんだよー」

ますます偉そうに胸を張るチルノに、二人は思わず笑みが零れた。

「それは凄い魔法だね！チルノちゃん凄いや」

「うん！」

誰かと仲違いをしたり、何かを失敗したり、誰かを傷付けたり……そんな時は皆、素直にごめんなさいと言うのは難しい物である。意地っ張りなチルノなら尚更だ。

普段から特にチルノと仲が良い大妖精は思った。チルノを言い聞かせ、勇気を持たせたジロは凄いと。だから思う。チルノはジロにありがとうと言いたいのだと。そして、願わくば友達になりたいのだと。

「チルノちゃんはどうしたいの？」

「うん、チルノの気持ちが一番だよ」

二人はそういつて答えを促すが、チルノは益々沈んでいく。妖精は本来は漂うものである。そこに存在しているが、かといって積極的にその他の存在に関わっていく事もない。

チルノ達のような妖精の中でも自我が強い存在だとて、それは基本的には変わらない。だからチルノは生まれくる感情に戸惑い、恐怖する。

どうしていいか分からないのだ。何故ならば、今までそう感じた事が無いからだ。大妖精は悲しくなってしまう。こんなチルノはチルノじゃないと。リグルはリグルでおろおろしてるのみである。

気が付けば三人は向き合ったまま膝を抱えてどんよりとしていた。  
ややもして

「そうだった！ジロさんを捜してみよう！」

突然大妖精は立ち上がり叫んだ。

「え？だ、大丈夫かなあ…嫌われたりしないかな？」

チルノは不安気だ。

「大丈夫だよチルノちゃん！私も手伝うからみんなで捜そうよ！」

リグルも笑顔で立ち上がる。

「ほら、チルノちゃん？魔法を習ったんでしょ？勇氣出してみましよう！」

「そうだよチルノちゃん！勇氣だそ〜」

二人はそうしてチルノの手を引き立ち上がらせた。

「うん！あたい、頑張る！ジロに魔法習ったもん！今度はありがとうの魔法だ！」

「「お〜！！」」

そして妖精達は空へ飛び立って行くのだった。



東方御伽草子

夕暮れの通りを次郎が行く。行き交う人々は足速に過ぎ行き、幻想郷に夜が来るのはあと少し。

次郎は昼間の間に仕込みを済ます。その為、開店間際は割りとお暇だった。

いつもはカフェで一服したり、足りない食材を物色しながらのんびりと過ごすのだが、今日の次郎は異様な雰囲気である。

現在彼は人里の通りをまるで忍者のように隠れ進む。キョロキョロと背後を伺いながら、通り脇に立ち並ぶ建物の影に身を潜めて屋台を目指していた。

そしてあと少しで屋台につくという場所で

「おい次郎、そこで何やっているんだ？」

軒先に隠れる次郎の背後から声がかかる。だが彼の行動は速かった。次郎は咄嗟に身体を反転させると、その何者かの背後に回り、背中から抱き付いた。右手は口を抑え、左手は腰に回してがっちり締め付ける。

「ムグー！ムグー！」

「（しーっ！静かにしろ！見つかるだろうが！）」

「ムグツ？ムグムグ？」

「（そうだ胡散臭い魔法使い、とにかく黙れ）」

「ムグっ」

そう、曲者の正体は次郎曰く胡散臭い魔法使いこと霧雨魔理沙であった。次郎としては騒ぐ魔理沙を黙らす為の行動だったが、今の体勢は少女を襲い、物陰に引きずり込む怪しいオッサンだろう。事実魔理沙は羞恥に赤面してる。

「は、離せよ次郎！全く助平な男だぜ……」

開放された魔理沙はぶちぶちと不満を述べるが、次郎はそれを無視して通りを警戒している。所謂セクハラをされた魔理沙であるから、その不満は当然であるが、にしても次郎の行動は不可解だった。

「なあ次郎、一体何をしてるんだ？やたら怪しいんだぜ……」

やれやれと言うように魔理沙はごちるが、突然次郎が振り返り魔理沙の肩を掴んだ。

「やい黒白！」

「な、なんなんだぜ……」

「お前、どこから来た！」

「じ、次郎の後ろ…かな？」

「誰かついてきてたか！」

「い、いや、知らないんだぜ……」

「……ちっ」

そして次郎は硬直した魔理沙を残し、素晴らしいスピードで走って消えた。

「り、理不尽だぜ……」

涙目の魔理沙が虚しく呟いた。

人里の外れにある屋台、喰いものやでは、まだ宵の口だが既に常連客で溢れていた。カウンターには慧音、妹紅と言いつつもの組み合わせに、珍しく八雲紫も並んでいた。

だが、あまり三人は楽しそうではない。何故なら目当ての次郎の様子がおかしいからだ。次郎はしきりに外を窺っており、話し掛けても上の空なのだ。いつもなら無愛想でもしっかり相槌をうつ。

どうもきな臭い様子の次郎に、三人はとうとう痺れを切らして問い詰める事にした。

「次郎様？」

「……………」

「おい次郎？」

「……………」

「次郎さんってば？」

「……………」

誰が呼ぼうが上の空。全く取りつく島もない。流石にここまで無視されて怒り心頭のご婦人方は

「……次郎……！！……」

三人の見事なユニゾンが次郎の鼓膜を襲った。

「な、なんだ一体……耳元で叫ぶな阿呆……」

耳を押さえながら漸く三人を見る次郎だった。

「何やら様子が変わった？どうしたの？次郎」

「ん〜いやさ？ここ数日見張られてるみたいなんだよ俺は」  
相変わらずキョロキョロしながら次郎は言う。

「なんだかわからんのだが、常に見張られている様な視線を感じるんだ。だからな、少し過敏になっている……済まない」

「見張られている、か。一応あたりの気配を探ってみただけど、そうね？悪意のある気配はしないわ？」

「…そうか、感謝する」

八雲紫は隙間を開いてそう言った。扇子で口元を隠しながら。紫は妖しく微笑っていた。次郎は気が付かないが。

「次郎よ、何かどこぞで女子おなこの恨みでも買ったのでは無いか？」

慧音が白い目で責めるように言い、

「次郎さんは女訝しだね……」

と妹紅がくさす。

「……阿呆が。訝す相手などいるかよ。こちとら女日照りだったの。忌々し気に次郎は吐き捨てた。」

「……(憎たらしい)」「……」

女性陣も何やら思うところがあるらしい。そして夜は更けていくのだ。つた。

翌日の朝、次郎は何やら視線を感じて目が覚めた。時折慧音や妹紅が乱入したりもするが、いま感じている視線はそういう類いのものではない。どうもこちらを窺っているような視線だ。

次郎は布団から這い出て、そのまま匍匐前進のように朝日眩しい障子に擦り寄った。そして、音を立てないように気を配り、指一本分の隙間をそろりと開けた。そして覗く

何かがいる

次郎が目を凝らした先、庭の畑の奥にある茂みにそれらは居た。

青いのと緑色のと頭に何かを生やした小さいのが次郎の家を見ていた。それらは恐る恐る近寄ってきているようだ。柿の木に身を潜め、蜜柑の木に身を潜め、最後は縁の下に消えた。次郎は見覚えがあると思案する。

次郎が記憶を辿っていると、暫くして

こつっ、こつっ……

縁側に何かが置かれた。次郎はそれをよく見ると、姿は見えないが縁の下から小さな白い手が伸び、縁側に氷漬けのカエルが次々と置かれていく。

三つ目のカエルが置かれた時に、伸びた手のその先に赤い大きなリボンが見えた。よく見たらその横には触角のようなものが見え隠れしている。その反対側には緑色の頭のとっぺんが薄らと見えた。

次郎はリボンを見てすっかり思い出した。いつぞやの湖で泣いていた妖精だと。確か名前はチルノ　次郎はにやりと笑うと忍び足で部屋から消えた。

「チルノちゃん、今のうちにだよ！」

「まだジロさん寝てるみたいだね。頑張れチルノちゃん!!」

縁側の下に上手く忍び込んだチルノ達だった。そして大妖精とリグルはチルノを励ました。

「う、うん、あたい頑張る……」

三人はここ数日の間、ひたすら次郎を捜して人里を彷徨っていた。実は捜索を開始したその日に次郎は見つかったのだ。だが、次郎を見つけた屋台には、恐ろしい大妖怪達が”うようよ”いたのだ。これでは生命に関わると三人は震え上がったのだ。所詮は妖精、大妖怪にかかれば一捻りである。

だから三人は次郎が屋台を閉めるまで草むらに身を潜め、以来、彼

をひたすら付け回した。

だが次郎は腐っても能力持ちだ。勘はそれなりに鋭い。次郎は何かにつけられていると感じたのか、三人が油断した際に彼女達を撒いたのだ。慌てて追い掛けた三人だが、結局見失ってしまった。

次の日から次郎と妖精の不可思議な鬼ごっこは始まり、紆余曲折ありつつも次郎の自宅を発見するに到ったのだ。因みに昨夜次郎の屋台を覗いていた時、隠れていた三人の目の前に大量の目玉が突然現れ、肝を冷やした三人は少しばかり粗相した。それほどの恐怖だったのだ。

そして今朝、三人は作戦を執行したのであった。

「よい…っしょ…重い…」

チルノは持参したお土産、霧の湖に住むカエルの氷漬けを縁側に乗せる。ジロは喜んでくれるかな？とドキドキしながら。そして持参した三匹全てを乗せると満足そうに息をついた。

「よし、終わった」

「後はありがとうと」

「友達になって下さい、だね！」

三人はニコニコとしながら肩を叩きあい、今日までの苦勞を讃えあった。あちこち彷徨いへとへとになった。凶悪な目玉の妖怪に睨まれた。人の子に追い回され、石を投げられた。全ては今日の為の苦



労であった。

よし、と気合いを入れたチルノが縁側を登ろうとしたその時

「悪い子はいねえがあ！！！！！！！！！！」

「「「ぎゃああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「」

いつの間にか後ろから忍び寄った次郎のなまはげ攻撃に 三人は  
悲鳴と共に目を回して倒れたのだった。

「……………んんっ……………ここは？どっ……………」

チルノが目を覚ますとそこは見知らぬ場所だった。ガバツと起き上がったチルノは辺りを見回すと、どうやら三人は大きな布団並んで寝かされていたらしいと気が付いた。

がららっ

チルノが呆然としてしていると、部屋の扉が開いて次郎が入ってきた。

「お、起きたか。びっくりさせてごめんな？ちよっとした悪戯だったんだが、お前さん達目を回して倒れちゃった」

罰が悪そうな顔をして次郎はチルノに謝った。

「あれ、ジロだ、ジロだ！」

急に笑顔になったチルノが嬉しそうに立ち上った。

「久しぶりだな、チルノ？ごめんなさいの魔法、成功したかい？」

「う、うん！ちゃんと成功した！あたい、頑張って勇気でしたらみんなと仲直りできた！！」

「そっか、良かったな？チルノ？」

そういつて次郎はチルノの頭を撫でるのだった。

「う、うーん……」

「はわっ……んんん……」

二人がそんなやり取りをしていたら、大妖精もリグルも目を覚ました。

「おや、起きたかお前さん達も。さっきはごめんな？悪戯が過ぎた。俺は次郎、この家の主だ。よろしくな？」

「あ、えつと、大妖精です…よろしくお願いします、ジロさん…」

「あ、あの、よろしくでしゅ…リグル・ナイトバグと言います…蟲の妖怪です……」

大妖精もリグルも、さっきの次郎の悪戯がよほど怖かったせいも若  
干腰が引けているようだ。だが次郎の柔らかい物腰に、少しだけ安  
心したらしい。チラチラと次郎を眺めている。

チルノは胡坐をかいて座っていた次郎の前に立ち、何かを言いたげ  
にしている。ワンピースの裾を掴んでもじもじとしているが、一向  
に喋らない。

「が、頑張つてチルノちゃん！」

「チルノちゃん魔法！魔法！」

大妖精達はチルノを一生懸命後押ししようと呼びます。

チルノはプルプルと震えていた。次郎にありがとうと言いたいが、そ  
して友達になりたい。だけど妖精なんか嫌だなんて言われたらどう  
しよう。その思いがチルノの心を締め付けた。

勇気、勇気、あたいは最強だから頑張れる。チルノは必死に自分へ  
言い聞かせる。だが、最初の言葉がでない。

「ジロ、あたひ……」

「ん〜？」

「あたひ……あたひ……」

次郎はそんなチルノを見てため息をつく、少し微笑した。チルノ  
が何を言いたいかは分からないが、何やら一生懸命で、とても健気

に見えたからだ。

「チルノ、この前のパン食うか？大妖精もリグルも腹減ってるだろ？」

「え、パン食べたい！でもなんで？あたい、ジロに迷惑かけた」

「ん？せっかく友達が遊びに来てくれたのに迷惑ってなんだ？」

驚くチルノ。

「あ、あたいはジロの友達なの？」

「俺はそう思ってたが、違ったのか？迷惑か？」

「ちがつ、あたい迷惑じゃない！」

次郎の言葉にきよとんとした後、ひどく狼狽えだすチルノ。友達になりに来たのに既に友達だった？チルノは混乱の極みにいる。

「あ、あの、ジロさん」

「なんだい大妖精ちゃん」

「えと、チルノちゃんといっ友達になつたのですか？」

「うーん、湖でチルノと会って、悩みを聞いて、最後はまたなと別れた。他人にはさようならと言う。でも友達ならまたなと言う。たしかあの時チルノもまたなと言ったぞ？だから友達なんじゃないかな？」

大妖精もリグルもぼかんとしている。でも言われてみたらそうかも  
しれない、とも思った二人であった。

「ジロ、あたい達は友達？」

「ああ、友達だ」

「大ちゃんとリグルは？」

「チルノの友達なら俺も友達かな」

「ジロ、あたい、あたい……ジロの魔法でみんなと仲直りできた。  
だから、その……ありがとうジロ。友達も嬉しい」

チルノは赤い顔を伏せながら、搾りだすようにありがとうと言った。

「「チルノちゃん！」」

大妖精達も笑顔になった。

「そっか、仲直りできたか。偉いぞチルノ！流石俺の友達だな。」

「うん！やっぱり、あたいったら最強ね！」

チルノに笑顔が戻り、大妖精とリグルは苦勞が報われたと嘆息し、  
チルノの笑顔を祝福するのだった。

こうして、小さな妖精達の大冒険はハッピーエンドで幕を閉じるの  
だった。

「さて、パン食べたいか？」

「食べたい!!！」

次郎はチルノの返事に満足そうに頷き、居間に行くぞと立ち上がった。

チルノを伴い部屋を出ようとした次郎は振り返り、まだ布団に座ったままの大妖精達を不思議そうに見た。

「お前さん達は食べないのか？」

「え、えつと、私達もいいのですか？」

「いや、良いも悪いも俺たちは友達だろう？俺はみんなに声かけたんだぞ？ほら行くぞ！」

大妖精とリグルは顔を見合せた。そして

「「はいっ!!!!！」」

今朝の次郎の家は、とても明るく賑やかになった。次郎は妖精の友達のために、ひたすらパンにハムを挟み続けたらしい。

おしまい。

### その後のお話

チルノ達はそれ以来ほぼ毎朝、朝陽とともに次郎宅に襲来するようになった。

チルノ、大妖精、リグルの他に、ミスティア、ルーミアと言う新顔も増え、次郎は流石に辟易した。

大妖精やリグルにミスティア等は次郎の畑やパン焼きを手伝ったりとむしろ歓迎したい位だったが、チルノとルーミアは大騒ぎするので次郎もへとへとになってしまう。妖精の本領発揮と言うところであろっか？

そんなこんなで次郎は涙ながらに午前は来るなど説得し、最後まで抵抗したチルノは次郎の従業員に言う話で丸め込んだ。

妖精おそるべし、次郎が今回学んだ事はそれに尽きるのであった。

登場人物

次郎の友達、チルノ

次郎の友達、大妖精

次郎の友達、リグル

次郎の友達、ミスティア

次郎の友達、ルーミア

隙間を覗いてニヤリ、八雲紫

常連客、上白沢慧音

常連客、藤原妹紅

初めて名前が書かれた魔法使い、霧雨魔理沙

妖精に懐かれし男、次郎



STAND BY ME (後書き)

前回は妹紅が従業員になったので、今回はチルノが従業員になるいきさつを書きました。

巷でいうバカルテット+ な今回でしたが、うちのチルノは所謂？なおばかさんとしてはかきませんでした。

頭のスペックは多少低いが、それより一生懸命が空回りする可愛らしいちびっこなイメージです。

ああ、チルノを娘に欲しいわ。

妖精に幸あれ

次回もよろしくお願いします。

人は見かけに因らぬもの 前編（前書き）

後半まとめられず、やむを得ずに前後編に致しました。文才無くて申し訳ない。

## 人は見かけに因らぬもの 前編

「妹紅、下拵えは終わったか？」

煮込みの火加減をしかめ面で見ている次郎が言う。

「ああ、終わったよ次郎さん。完璧さあ」

にやりと笑いながら妹紅が胸を張る。次郎は野菜の下拵えを終えた妹紅を一瞥し、それらを見た。

「ふむ……」

「ど、どうだ？」

一つずつそれぞれを摘んでいく次郎。目を閉じ、神妙な顔で静かに咀嚼していく。それを見る妹紅は縋るような目付きで次郎を見ていた……。

時は少しばかり戻る。妹紅が喰いものやの従業員になって三日の事だ、未だ次郎は彼女を店に立たせてはいない。話が違うぞ！とこねる妹紅を次郎はバツサリと斬って捨てた。

「お前は肉を焼かせたら天下一品だ！だがっ、野菜を切らせたらチルノに劣る！故に、まだ店に立たせるつもりはない！！」

次郎の家の厨房で、床に這いつくばるように落ち込む妹紅を、次郎は刺すような目線で言った。

(チルノに劣る…チルノに劣る…チルノに劣る…チルノに劣る…)

妹紅は絶望した。”あの”不思議妖精チルノに負けている自分に。涙が出た。あまりの不甲斐なさに。それよりチルノに劣るとあの烏天狗にばれたら幻想郷では生きてはいけない。これは由々しき事態である、と妹紅は泣いた。

ピカツカシャツ

「!?!」

その時突然まばゆい光と異音が響いた。妹紅は弾かれるように窓を見ると、そこには平和の象徴、PEACEのハンドサインをしながら素敵な笑顔で飛び去る烏天狗、射命丸文の姿が見えた。

「終わった…全ての意味で私終了…」

妹紅は追い掛ける気力も湧かずに崩れ落ちた。そもそも追い掛けた所であるスピード狂に追い付けなどしないであろう。

「さあ、茶番は終わりだ妹紅。お前は一週間で野菜の下拵えを完璧に覚えて貰う!それまではここで泊まり込みで修業だ!」

悲しみに暮れる妹紅に次郎の叱咤が飛ぶ。

「チルノはいるか？」

「なにジロ。あたいつたら忙しいの」

厨房の奥からチルノがふよふよと飛んできた。その手にはキラリと光る包丁がある。

「なあチルノ、悪いけどお前さん、妹紅に野菜の下拵えを教えてやってくれないか？チルノは最強だから楽勝だろ？」

「うん！あたいつたら最強だからモコに教える！モコ、あたいがあんなの先生だよ！」

次郎に煽てられご満悦のチルノは、妹紅の前に立つと笑顔で返事した。

因みに、チルノを知る者には意外であろうが、実はチルノは優秀なのだ。たしかに不思議妖精であり、計算等は全く出来ない。だが、チルノは単純作業は凄まじかったりする。

野菜を切る。米を研ぐ。下茹でする。容器に綺麗に詰める。これらは次郎が啞然とする位に上達したのだ。チルノは退屈が嫌いで落ち着きが無い。次郎はそれを逆手に取った。

作業の工程を教え、ゲームのように次郎はチルノと競争する。チルノがやり終える寸前に次郎はわざと手を抜く。すると当然チルノは得意満面になり、次郎はチルノを褒める。

そして次は「素早いチルノは素晴らしい。だけど綺麗に出来たらも

つと最強になれるな」と次郎はハードルをあげる。子供が遊ぶときの集中力に大人は適わない。だが、長くは続かない。それは飽きるのが早いからだ。ならばと次郎は工程をいくつかに分けて、遊びの種類を増やしたのだ。

結果、約一週間でチルノは計算以外の仕事は実戦レベルまでに達した。その過程で大妖精達を集め、チルノに料理を振る舞わせた。大妖精達は凄く凄いと囁し立て（実際それなりに美味かったりする）チルノはどんどん自信を増したのだ。

チルノはゲーム感覚に技術を上げ、人に料理を振舞い感謝される喜びを知った。そしてそれは彼女自身の自信になり、付け焼き刃では無い財産となった。

今では仕事の楽しさを覚え、自発的に店に関わっている。

因みにチルノの給料は、本人がお金の扱いが苦手なので現金は無し。その代わりに仕事が終わったら、大妖精達へのお土産としてチルノが料理を作る。そしてその材料費を次郎が持つと言う権利と、週に二回次郎にオヤツを買ってもらえる権利が給料代わりだ。もちろん大妖精達の分もだ。

そんなわけで次郎が、妹紅の指導講師としてチルノを指名したのは別に嫌がらせな訳ではない。その実力があるからだ。

苦虫を噛み潰した表情の妹紅だが、笑顔のチルノに毒気を抜かれ、大人しく「よろしくチルノ」と頷くのだった。

それから七日間、不思議妖精と不死の妖術使いと言うシニールな師弟関係は続き、毎晩のように徹夜で二人は頑張った。

そして今朝、次郎から「今日の午後には試験をやる。合格なら今夜から店に立つのを許す。だが不合格ならお前は一生下働きだ」と通達された。

緊張に膝を震わせる妹紅に、チルノ師匠は優しく肩を叩いて言った。

「あなたは大丈夫」と。

二人は抱き合い涙を流す。今日まで沢山の苦労、そして語られないドラマがあったのだろう。感極まった二人が見せる師弟愛は美しい。

そして時計の針は元に戻り

「ど、どうかな？」

不安そうな妹紅。柱の陰からこっそり弟子を見守るチルノ師匠。

「……合格だ妹紅。よくやったな。チルノもお疲れ様だ。さ、妹紅よ？お前も今日から正式にうちの従業員だ！」

笑顔で次郎が祝福する。師弟は号泣しなら抱擁を交わす。

「な、ならさ？次郎さん……一緒に店に立てるな？」

「ああ、そうだな」

「ふふつやったぞ……なあ次郎さん、他人が見たら、えと、なんだ、その、夫婦って間違えられたり……ごによごによ……」

「ん？」

「なっ、なんでもないよ！わはははは……はあ」

漸く次郎と並べる嬉しさに、危険な妄想をする妹紅だったが、世の中そう甘くはない。

「喜んでるとこ悪いが妹紅よ、お前さんに店主からの命令がある」  
びしつと妹紅を指差す次郎。

「へっ！？は、はい」

怪訝な表情の妹紅。にやりとあくどい笑顔の次郎。

「あゝしばらく俺は泊まり掛けて出掛ける。ついてはチルノ店長代理の指導の元、平店員藤原妹紅くん、しっかりと仕事に励みたまへ





喚く妹紅の手から手紙が落ちた。そこにはこう書いてあった。

『藤原妹紅殿、あの時はよくも色仕掛けでやってくれたね？これは意趣返しだ！チルノ”店長”代理と一週間ほど頑張ってくれたまへ。ああ、僕は綺麗なお姉さんと旅行行ってくるから。土産を楽しみにな？ではあでゆゝ　あなたの次郎より』

結論、現実是非情である。

### 東方御伽草子

「なあ八雲の。物凄くヤバい場所に連れてこようとかしてないか？つて、ひいひい……また人魂が通り抜けてったぞっ！！」

と、次郎が騒いでいるのは置いて、現在八雲紫と次郎は空を飛んで移動していた。八雲紫の隙間を使えば一瞬で目的地につけるのであるが、彼女曰くそれでは旅行の風情がないから駄目だと言う。

だがそもそも次郎側は旅行なんて思っただけじゃなかった。八雲紫が何やら畏まって友達に会ってほしい、ただ遠い場所だから泊まり掛けたと言われただけだ。

だが、気が付いたら風情のある男女旅行的な雰囲気になっていただけだ。どうしてこうなったと次郎は思うが、横で満面の笑みの八雲紫を見れば、それは野暮かなと流されるのが次郎なのである。

取り敢えずは彼女と、彼女の友達とやらが住む館へと向かっているのだ。ただ、その目的地とやらが建っている場所が問題なのだ。

その場所とは冥界。

死人が住まう幻想郷の僻地である。次郎がこんな場所に住んでいる者などいるのか？と訊ねると、居るわよ幽霊がと普通に返された。むしろ何言ってるの？と言わんばかりの八雲紫の表情が、非情に勘に触った次郎である。

「これから行く場所は、白玉楼と言う場所よ。そこには大きなお屋敷があつて、その主人が西行寺幽々子と言うの。私の……凄く古い友人なの」

そういつて八雲紫は顔から表情を消した。

「白玉楼……白玉楼ねえ……」

次郎は相槌と言つには曖昧な口調で呟く。

「白玉楼の人となる」と言う大陸の故事成語があつたな確か……。なんだつたかな、そうだ、文人が死んだら天帝の使いがやってきて、白玉楼に召し出してあなたの記を書くことになったとか……。よくわからんが、きつと凄い爺さんが待ち構えていそうだな」

次郎は記憶の引き出しを開けては見たものの、うろ覚えだったようできない臭い表情でそれを引つ込めた。

「お爺さんではなく、美しい少女よ？でもちよつと訳ありでね。特に何かして欲しい訳じゃないけど、ただ他愛のない話でもしてくれたらいいわ？」

くすりと笑つた八雲紫は、先ほどもまでの真剣な表情は消してしまつた。そんなある種達観仕切つてしまつたような佇まいの彼女を見つめ、次郎は充分お前さんも少女だよと思つた。まあそれはあくまで見た目だけだがね　と言つたら怒るだろうなと次郎は微妙な笑みを浮かべる。

「なあに？含み笑いなんて気味が悪いわ？」

「ん？相変わらずお前さんは綺麗だねつて思つてたところさ」

「あら、うれし……。でも誤魔化された気がするわ？」

「いい女つてものは、男の可愛い嘘を知つて騙されてくれるもんだ」

「そういうものかしら？」

「そういうもんさ」

軽口を飛ばしあいながら飛行する二人に白玉楼の全景が見えてきた。次郎はふと止まり、その場に浮いたままそれを眺めた。

「どうしたの？急に止まったりして？」

隣に居たはずの次郎が動かなくなり、怪訝な表情で八雲紫は振り返る。

「ん……なに、素晴らしいなと思ってな。こんな立派な建物、俺は見たことが無いな。八雲には違和感無いのかも知れないが、普通の人間でしかない俺じゃ圧倒されてしまう。俺はこんな不思議な紫色の空は見たことないし、その真ん中に建つ白玉楼は異様に溶け込んでいる。冥界とはよく言ったものだ。確かに生を感じられない。だが、素晴らしく綺麗だ」

次郎が見ている景色は摩訶不思議である。紫色の空に人魂が飛びかい、空気は止まったかのように揺らぎは感じられない。これらを囲むように山々があり、まるで水墨画をそのまま写したようだ。そしてそこに溶け込んでいる白玉楼。

巨大な建物ではあるが、不思議と自己主張は控え目に見える。つまり、全てが計算されたかのように　冥界と言う一枚の絵のように必然としてそこに存在しているのだ。

そうして圧倒されたまま茫然と佇む次郎を、くすりと微笑んだ八雲紫は彼の手を取って着地した。

二人の目の前には冥界の入り口、白玉楼の立派な四脚門が建っている。その横に一人の少女がこちらを見てたっていた。

「失礼、こちらは白玉楼です。何かご用でしょ　あ、八雲様？珍しいですね、門からいらっしやるなんて？」

白玉楼の門番であろう少女が八雲紫と言葉を交わす。話し振りからすると、彼女は普段は隙間で出入りしているようだ。

「ふふつ、今日は幽々子に紹介したい人を連れてきたのよ。だから彼に白玉楼の素晴らしい庭園を見せてあげたくてね？」

「それは嬉しいです！是非じっくり見てほしいです！あ、えつと……」

次郎の前に少女が立つ。艶のある銀色の髪に特徴的なサイドリボン、緑色のフレアスカート、小柄な体格と見た目は美少女と言う体である。だが彼女が異質なのは帯刀している所だ。背中に背負うようにしているのは、腰だと長刀を引き摺る事になるからだろう。

「次郎、紹介するわね？彼女の名前は魂魄妖夢。人間と幽霊の混血で半人半霊よ。彼女は白玉楼の庭師であり門番でもある。要はお庭番ね。で、妖夢？彼は次郎。能力持ちだけど人間よ。元外来人で今は人里の名物屋台の経営者よ」

八雲紫は二人を引き合わせる。

「次郎様、魂魄妖夢です。宜しく願います。次郎様？次郎さ、みよん！？にやにやにやにや！！？」

次郎に自己紹介をする妖夢だったが、物憂げに彼女の周りを漂っている白いモノを眺めていた次郎が、突然白いモノを突き返し、しまいいには抱き付いたのだ。

「じじじ次郎さまあ！やめ、やめめてくだひゃい！それは私の半身ですう！ひゃあ！はは破廉恥ですよう！！」

何やら妖しく悶える妖夢だったが、次郎は何処吹く風だ。あまつさえ頬擦りしている。

「なんでだ……ひんやりして気持ち良いぞ？」

「ちよ次郎、離れたげて！それは彼女の半身だからちゃんと感覚もあるのよ？」

普段冷静な八雲紫も慌てている。

「ちっ…仕方ないな……」

「は、はふう……」

渋々妖夢の半身を離す次郎だが、どこか残念そうだった。息も絶え絶えな妖夢にしたらたまったもんじゃないだろう。

「あ、あの、気をつけて欲しいです次郎様……そういう行為はまだ早いです……はい……」

何やらもじもじと消え入りそうな声で何やら呟いていた。次郎としては、妖夢の半身をどこかで見覚えがあると眺めていたのだ。そして、ふよふよと動く様に何かがそそられた。

つつく

柔らかい……

つつく

痙攣する……

もう駄目だった。気が付いたら抱き付いて頬擦りしていた次郎だった。ペコペコ謝る次郎に苦笑いする妖夢だが、何とか許して貰えたようだ。

「さ、妖夢？幽々子の所まで案内してちょうだい？」

「はい、では此方へどうぞ」

門が開き、歩みを進める妖夢と八雲紫。だが次郎は動かない。何やら思案しているようだ。

「次郎様？」

「次郎？どうしたの？」

二人が声をかけるが次郎は腕組みして目を閉じている。すると突然次郎が叫んだ。

「ああ！！ア ヒビールのビルのオブジェだ！！いやあ、思い出せ



なくて気持ち悪かったんだ。あーすっきりしたわ！さ、行くところ行く！」

一週間溜め込んだ宿便がでた後のように清々しい顔で歩きだす次郎。

「アヒ」

「ビール……？」

後に残された八雲紫と妖夢はぽかんと顔を見合わせるのだった。

つづく

登場人物

新しい従業員、藤原妹紅

店長代理、実は出来る女、チルノ

PEACE！！射命丸文

綺麗なお姉さん、八雲紫

八雲紫の親友、西行寺幽々子

白玉楼の門番、魂魄妖夢

名物屋台の店主、次郎

## 人は見かけに因らぬもの 前編（後書き）

いつもタイトル前に小話を書いて、タイトル後に本編と言う流れですが、僕のもこたん愛が大きすぎるのか、小話レベルで収まりませんでした。反省はしてますが、後悔はしてません。

チルノ……なんか魔改造されました。？ではない匠チルノとなりました。

以下一話で収まらなかった言い訳

幽々子様のキャラが定まらなかったが理由です。

フードファイターキャラにしたくなかったので、色々いじったらどんどんまとまらなくなってしまう……。なので後編をいまこねくり回してます。

幽々子好きなんだけどね、逆に考え込んでしまった。

基本白玉楼から出ないであろう幽々子様。みよん以外の使用人幽霊は彼女にどう接しているのか？

幽々子は西行妖を眺めて、日がな静かに暮らしているのか？

生前の記憶の無い見た目は薄幸の美少女であり、幽霊となっからほわんとしたイメージ。

この人の日常が想像つかないんですね。

なので今、非常に悩んでいます。

可愛くかけたらいいなあ。

最後に次郎が叫んだアサヒビールのビル発言ですが、関東に住んでない人には分からないかもなので解説します。

実在のビルでして、浅草にあるアサヒビール吾妻橋ビルと言う名前です。

金色で、まさに妖夢の半霊と言った形状のオブジェクトがビルの屋上に乗っています。

「アサヒビール う こ」でググると見れます。

でも実際は、炎をイメージしたオブジェクトらしく、有名フランス人デザイナーの作品らしいですよ。

僕にはう こしか見えませんが( ^o^ ) ;

現在は品川に住んでいるので縁は無いのですが、昔は浅草に住んでいたのうちのマンションからう こが見えました。

仕事で疲れてふと窓を見るとそこには金色に輝くう こ……シユール過ぎます。

以上

後編頑張ります。

人は見かけに因らぬもの 後編(前書き)

後編です。後書きにアンケート書きました。良かったらご協力お願いします。

## 人は見かけに因らぬもの 後編

ばちばちと赤い火花を散らし、七輪の中で炭が赤々と燃えている。それをじつと見ている面々の顔も赤い。

次郎は火の番として、いま赤々と燃え盛る炭が落ち着き、所謂置き火になるのを見守っている。

炭の火力とは、物を焼くには少々強過ぎる。そのために炭の周りにある程度焼け、芯のみがじわじわと燃えている状態まで待たねばならないのだ。そうしないとあっという間に食材が焦げてしまう。

後数分で大丈夫であると感じた次郎は、なんとなく白玉楼の縁側をちらりと見た。

そこにはこの館の主人である西行寺幽々子と、その盟友の八雲紫が並んで座り、次郎の姿を眺めていた。

西行寺幽々子は次郎に対面した際は洋装であった。だが今は和服に着替えている。淡い藍色の艶やかな小紋だ。染めも派手すぎず、さり気なくあしらわれた桔梗の花がいつそ涼やかで、幽々子の雰囲気的に艶を与えていた。

ただ、頭にある不思議な紋の三角の布が、彼女が既にこの世の存在ではない事を主張してるかの様だ。

因みに次郎が、幽々子の三角布は死に装束であり、その由来は鬼の角を表わしているらしいと言った。さらに幻想郷には鬼がいるなら鬼が死んだらどうするんだ？と言い出した。結果は八雲紫も幽々子

も妖夢も押し黙り、何やら微妙な空気になってしまった。そんな次郎は幻想郷の常識は謎であると首をかしげた。

### 閑話休題

和服に着替えたのは幽々子だけではなく、八雲紫は幽々子だけずいといとこね出して、隙間から立派な打ち掛けを取り出し、あまりに派手過ぎてどこの花嫁さんだと次郎は呆れた。

そもそも何故に和服に着替えたかと言うと、次郎のせいである。

次郎の普段着は少し変わっており、白いシルクに刺繍がふんだんにあしらわれたカンフージャケットのようなものに黒い麻生地のパンツ、それに無地の紬を自分で染めたものを引っ掛けている。

それを見た幽々子は「あら、綺麗。私も着たいわ」と自己紹介も放り出し、館の中へと消えていったのだ。唯我独尊、全くのマイペース。天真爛漫が服を着ているようだ。次郎は呆れたものだ。

八雲紫はと言えば、諫めるなり苦笑いするかと次郎は思ったが、「あ、私も」と隙間に消え、残された次郎と妖夢は微妙な空気に顔を合わせたのだった。

とにかくそうして幻想郷の重鎮二人の行動を、苦笑い出来る余裕が自分には身に付いたのだと、的を射てるのかそうでないのか分からない自信を深め、苦笑いで二人の美女を待つ次郎だった。

妖夢の「うちの主人が申し訳ありません」と言う言葉が虚しく冥界の景色に消えていった。



東方御伽草子

和服美人二人が見守る中、何故に次郎が炭を焚くのか？それは秋の幸を熟々のまま楽しみながら、それを肴に酒宴と洒落こもうと言う八雲紫の提案からだ。

八雲紫は最初、隙間を使って外の世界で買い出しをしようと言ったのだが、次郎が「いつそ松茸が生える山に繋いで掴み取りとか出来ないか？」との提案に、一同はぽんと手を打ち実行したのだ。

場所は丹波の赤松が生い茂る里山。山の持ち主が下草や落葉をきちんと手入れしているようで、八雲紫の隙間を開き、あちこち移動させた所、まさに入れ食い状態。小一時間で竹籠二つに山盛りという有様だ。

山の持ち主は涙にくれただろうが、ここは幻想郷である。交通事故だと思えと次郎は笑った。

妖夢など夢中になって松茸を狩り、あまりのはしゃぎように次郎は見た目通りのあどけなさだと言い、それを幽々子が更に囁し立てると彼女は拗ねてしまった。

ぷんぷんと可愛らしく怒りながら、妖夢は松茸を調理すると籠を担いで厨房に消えて行った。

少し大人気なかったと慌てた次郎は、自分も厨房を借りると幽々子

に許可を貰い、妖夢を追い掛けるのだった。

厨房に辿り着いた次郎は、白玉楼の厨房の見事さに感嘆のため息を漏らした。二十畳ほどの広さに六つの釜戸。水場も広く、作業台も大きく、何人もの料理人が同時に働けるスペースがあった。もっとも現在居るのは妖夢ただ一人であるが。

「妖夢さん、からかってごめんな？許してくれやしないか？」

頬を掻きながら気まずそうに言う次郎。

「……いえ、怒ってません！どうせ子供っぽいですから！」

どう見ても怒っている妖夢は、次郎を見もしないで手を動かしている。だが実際、彼女の容姿はせいぜい小学校の低学年くらいにしか見えないのであるが。

ふう、と溜め息一つついた次郎だったが、意地になった子供にしくこくすれば逆効果だと思い、取り敢えず料理に取り掛かった。

土瓶に薄い出汁を張り、酒と塩で味を整え松茸の浮かべる。香りを楽しむ料理である土瓶蒸しだ。

土鍋では同じく薄い出汁に薄口醤油で味をつけたもので飯を炊く。炊き上がりに”これでもか！”と言う位の松茸を薄切りにしたものを乗せ、蓋をして蒸らす。松茸ご飯だ。

後はシンプルに天ぷらにした。真鱈の白子があれば最高なのと思いながら、次郎は出来上がった料理をお盆に載せようとしたが妖夢がいつの間にか次郎の肩口から覗き込んでいた。

「……どうした？涎が垂れているぞ？」

「みよん！？ここのこれはべべべつに…むぐぐ…」

顔を真っ赤にして慌てる妖夢の口を布巾で拭き取る次郎だった。

「取り敢えず怒ってなくて良かった。さあ運ぶから手伝ってくれ…  
…みよん」

「むむつ！次郎様は意地悪です！」

口調を真似され、ぷくりと頬を膨らます妖夢に、やはり餓鬼じゃないかと心ひそかに思う次郎だった。

「……で、覗き見は楽しいのかい？お二人さん？松茸尽くしは妖夢と食べる事にしようか？」

次郎と妖夢の背後に密かに開いていた隙間が無音で閉じた。次郎の言葉に出歯亀していた妖怪の重鎮は冷や汗をかいたのだった。

しばらくして白玉楼の客間は、次郎の料理と妖夢が用意した酒で華やかになった。次郎は仕上げだと七輪で松茸を焼き、漸く卓についたのである。

「では、幽々子と次郎の顔合わせと、私たちのこれからの友情を祈り、乾杯しましょ。乾杯！」

八雲紫の掛け声に、皆は静かに杯をかかげた。ふう、と言う美味なる溜め息に、一同は静かになった。そしてそれぞれ料理に手をつけ、

また無言で食する一同。人は美味しいものを口にすると、逆に無口になるものである。それは妖しだとして変わらないようであった。

腹がくちくなり、皆の食すペースが遅くなってやっと会話が進みはじめた。

「次郎、貴方の料理は本当に美味しいわ。ねえ、幽々子？」

「そうねえ〜いつそ白玉楼で料理人をしてほしいわ〜」

「次郎様のごはん、とっても美味しいです！」

大絶賛のお褒めの言葉に、珍しく得意満面な次郎だった。料理を作るものに”美味しい”の一言は、最高の労いである。

そうして酒宴は続いていく。夜の帳が降りてきて、淡い月光が障子を開け放たれた部屋に注ぎ込む。その為灯りをともさずとも、それなりに明るい。

騒ぎ疲れたのか、幽々子も八雲紫も静かに手酌で飲んでいる。妖夢は酔いつぶれ、畳の上で次郎の袖を被り幸せそうに眠っている。

ふと次郎が幽々子を見ると、庭の方を静かに眺めていた。その表情はどこか淋しげで、先ほどまでのふわりと愉しげな彼女の印象は消えていた。

次郎は酒を呷りながらじつと幽々子を見ていた。二人は卓を挟んで向かい合う位置に座っている。頬杖をつく幽々子は、清楚だった見た目は鳴りを潜めてどこか妖艶だ。月明かりは女の魅力を増すようだ。

「幽々子さん、どうしてそんな悲しげなんだい？」

「ん、別に悲しい訳じゃないの。ただ空虚なだけ。私には思い出せる過去が無いわ。在るのはこうして繰り返す今だけ。退屈な毎日だけなの」

くすりと微笑いながら、幽々子は次郎を真っ直ぐ見つめる。次郎の隣で静かに飲んでいた筈の八雲紫は、いつしか座ったまま眠っていた。首が辛そうだなと次郎は膝に八雲紫の頭を乗せてやる。幸せそうに呻いて、また微睡んでいる。

「思い出せる過去か……それは決して幸せとは限らない。受け容れたくは無い過去もある。だが結局、人は過去を忘れなければ生きていけないんだ。少なくとも幽々子さんには妖夢や紫がいるだろう？ 今過ごしている時間も、明日には過去にある。今を大事に生きる事は、同時に明日の過去を慈しむのと同じなんだ。う……ん、柄じゃないな」

苦笑いしながら次郎は言った。自分ほど過去に縛られている人間は居ないと考えているからだ。

「今を大事にね……そう、そうかもしれないわね。紫が心を許す貴方の言葉なら信じられるわ。ねえ次郎、横に行ってもいい？」

「……ああ」

ふわりと立ち上がり、幽々子は次郎の隣に座った。肩にしなだれかかった幽々子の軽さに少し驚き、だが次郎は何も言わずに酌をする。

「貴方、不思議な人。つい寄りかかりたくなる。ごめんなさいね」

「別に構わない。美人の頼みだからな」

「ふふっ、嬉しいわ。ねえ次郎、またこうやって一緒に呑んでくれるかしら？」

「ああ、友達だからな。またこうして呑むのはおかしくないだろうさ」

「そうね、お友達なものね。また呑みましょう」

二人は少しだけ笑い、そしてまた静かに呑む。夜の音を聞きながら。暫くして幽々子もまた眠りに落ち、次郎の膝を枕に幸せそうな寝息をたてはじめた。次郎は悪くないなとくすりと笑い、一人静かに呑む。

「……次郎、ありがとう。幽々子と話してくれて。本当に大事な友人だから嬉しいの」

いつの間にか目を覚ましていた八雲紫が次郎を見上げていた。

「なあに、今や幽々子さんも友人だ。友人の愚痴を聞くのは苦にならない。さ、もう少し寝とけ。相変わらず疲れた顔してる」

「はい」

そういつて八雲紫は猫のように身体を丸め、改めて次郎の膝で眠った。

静かな白玉楼の夜は更けていくのだった。

さて、ここは人里にある名物屋台「喰いものや」である。今日もここは繁盛していた。

カウンターには慧音や霊夢、魔理沙に鈴仙といつもと変わらぬ常連客で賑わっている。いつもと少しだけ違うのは、カウンターの中に次郎が居ないことと、チルノが代わりに店を廻していることだ。その横で妹紅が忙しく注文を聞いている。

「なあ妹紅、次郎は今日はどうしたんだ？」

「そつよ！次郎さんを出しなさいよ。この前のお礼がしたかったのに」

慧音は勿論、霊夢まで不満気に妹紅に問いかける。だが妹紅は不機嫌を露にし、睨み付けるように言う。

「……居ないよ次郎さん。一週間は帰らないとき。隙間妖怪に拉致されて旅行だよ。つたく…漸く魅惑の夫婦屋台とか思ったのにさ……」

忌々しそうに妹紅は吐き捨て、かぶがぶと酒を呷った。一同は何か言いたげだったが、今の妹紅は危ないと見てみぬふりを決め込んだ。だが、チルノの目がキラリと光る。

「モコ、今のはちゃんとつけといたからね！きちんと部下を叱るあ

たいつたら最強ね！」

「し、師匠……」

ふんぞり帰るチルノに頭の上からない妹紅だった。どうやら修行から以後も師弟関係は続いていたらしい。そんな二人の關係に、鈴仙は自分と薬師の師匠との關係をだぶらせ遠い目をした。そこへ

「次郎はいるかしら？一番仲が良い”友達”の私が会いに来たわ！」  
やってきたのは紅魔館の主、レミア・スカーレットであった。側には瀟洒なメイド、十六夜咲夜が控えている。

「ねえ、次郎は？早く次郎を出しなさい！」

無い胸を張りながら妹紅を指差すお嬢様に、妹紅の中で何かキレた。

その日、何故か喰いものやでは、朝方まで弾幕ごっこが繰り広げられたと言う。なんだかんだで幻想郷は今日も平和だったという。ただし破損した部品の修理代は、チルノ店長代理により妹紅のつけになっていた。

「次郎様、早く帰ってきて下さいませ……」

愛する主の子守に疲れ切った咲夜が、夜空の向こうの次郎に呟いた。



登場人物

誘拐者、八雲紫

白玉楼が主、西行寺幽々子

子供っぽい魂魄妖夢

今回はいい男、次郎

店長代理、チルノ

キレル女、藤原妹紅

出番が少ない上白沢慧音

私だってお礼くらい言つわよ！博麗霊夢

影が薄いんだぜ…霧雨魔理沙

妹紅に不思議な親近感、鈴仙・優曇華院・イナバ

次郎の一番のお友達（自称）レミリア・スカーレット

幻想郷一番の苦勞人、十六夜咲夜

人は見かけに因らぬもの 後編（後書き）

今回は幽々子さんを中心にでした。

二次とかにも色々幽々子さんの話は作られてますが、この作品では  
敢えて描写しませんでした。

ただ、酒宴の最中に幽々子本人と紫によって語られた筈です。

まあ、たまには弱さを見せたかった幽々子さんと、寄り掛かれる  
次郎ではあるが、彼もまた過去に想いは残している。

そんな二人のおとなな傷の舐めあいを書きたかった！でも書けなか  
った！描写不足が否めない。

ただ毎回五千字縛りで書いているので諦めました。

次回からもう少し頑張ります。

よければ感想を頂けると嬉しいです。

そしてアンケート

次に絡むのは……

? 守矢神社

? 永遠亭

? 聖蓮船

? 地下いけコラ

? 馬鹿野郎、妖怪山行って権モフねや。あ、ついでに文も

? 自由枠（この嫁と絡めやコラ）

? あたいつたらサイキョーね!!!

以上、よかったら協力お願いします。

奔放自在、行楽の秋 その？（前書き）

お知らせ

次に絡むのは…というアンケート内容でしたが、結果は。

？守矢神社 が2票

？永遠亭 が2票

？聖蓮船 が4票

？地下いけコラ が2票

？馬鹿野郎、妖怪山いって権モフれや。あ、ついでに文も…が1票

？自由枠（この嫁と絡めやコラ）が1票

？あたいつたらサイキョーね！！が1票 ！？

と、なりました。？に入れた愛すべきおバカさんに敬意を表しつつ、アンケート、これにて〆切りとさせていただきます。

たくさんの方の投票ありがとうございました。

と言う事で、聖蓮船 で参ります。

原作を紅魔郷へ永夜抄までしかやってない私に対する挑戦ですね、

わかります。  
では本編をどうぞ

## 奔放自在、行楽の秋 その？

ここは人里の外れにある次郎の自宅である。周りには他の民家は無く、木々に囲まれた閑静な場所だ。

山や森は赤々と色付き、秋の深まりを、朝晩の冷え込みは冬の予感を感じさせる。今年の幻想郷は畑から取れた作物は豊作であったが、今は冬の葉物以外は土色を晒し、物悲しさを醸し出す。

庭に面した障子を全て開け放たれた次郎の家は、今、数人が惚けて茶を啜っていた。

茶の間の卓にはこの家の主人である次郎と、彼の屋台で従業員をしているチルノと藤原妹紅、そして妹紅の親友である上白沢慧音が寛いでいた。

四人は特に会話もなく、なんとなくこの静かな秋の日を楽しんでいた。ただ、ばりばりぽりぽりと不思議な音が、煩い程に辺りに響いている。

「……この沢庵、お茶請けにと思ったが、けしからんな……」

沈黙を破り次郎が呟く。

「確かに……とまらんぞ次郎。帰りに少し貰って帰ってもいいか？」

「ああ、少し漬けすぎたからな。持って帰れ。ついでに寺子屋の飯時に生徒に振る舞ってくれ。ああ、巫女にもお裾分けするか。チルノ、後で届けてやってくれないか？」

次郎は慧音に頷きながら、チルノに問い掛けた。

「むぐむぐ……いいよ。ジロ、大ちゃん達にもあげてもいい？」

「ああ、お菓子も一緒に持ってけ。ああ、巫女にお菓子は見せるなよ。食われるぞ？」

「わかった！あたいに任せろ！」

「頼むなチルノ。で、妹紅は何をしている？」

チルノと話していた次郎だが、その後ろでこそそと何処かへ行こうとしていた妹紅を制止する。

「うぐつ……沢庵飽きたから野沢菜漬けを食べたいな〜なんて……だめ？」

「はあ……ちゃんと皆のも切つてこいよ？」

「やった！行つてきま〜す！」

食欲の秋とはよく言ったものだ。

冬になれば食物の収穫も、山の実りもない。まして幻想郷には海もない。現代地球のように電化製品なんかある訳もない。

つまり、保存食を蓄えておかなければ冬は越せないのである。次郎はたくさんの漬物を作り、一家総出で川で捕った鱒の類を大量に燻製にした。干柿や干芋を作り、凍み芋も作るつもりだ。

こうして人は季節に合わせて生きていく。自然とは過酷なものなのだから。

「食欲の秋ねえ……太らなきゃ良いけどな？お嬢様達よ」

一斉に目を逸らす女性陣であった。

### 東方御伽草子

きっかけは妹紅のふとした言葉から始まった。それはある晩何時ものように慧音が喰いものやに飲みに来て、妹紅と話をしていた時だ。二人は親友であるから話も弾む。

慧音は寺子屋の子供達に世間を見せるために遠足に行かせたい。だが、現実的に厳しい等とため息をついていた。

流石にそれは難しいと、次郎や妹紅は同調した。幻想郷にはマヨヒガ、紅魔館、白玉楼、永遠亭、妖怪の山のようにパワーバランスを担う要所がある。それらは人間が関わるには荷が重すぎる。次郎の様な存在は例外でしかないのだ。



だが博麗神社や守矢神社ならば、神様がいるのだ。(博麗に関しては特殊であるが)なら神社とは人間の訪れるべき場所であり、慧音としては生徒達の情操教育の一環として最適と感じたのである。

そう思った所で実現は中々難しいとボヤク慧音と言う訳だ。

そんな話の最中、妹紅はなんとなく思案気な表情で黙り込んだ。訝しく思った慧音が”どうしたのだ?”と訊ねた所

「そうだ次郎さん、せつかくの紅葉の季節だ。息抜きにどこか行楽に行かないか?」

と、言い出した。それを聞いた次郎は、暫く考えた後にこう言った。

「そういえば開店以来、休みらしい休みは取ってないな……いつそ皆で大人の遠足にでも行くか?」

と、次郎にしては珍しく乗り気で言った。それを聞いた妹紅やチルノは興奮し、あつという間に本決まりとなったのだ。慧音は寺子屋を休めない為、悔しそうに断念したが、チルノは妖精仲間を誘うとはしゃいだ。

客として居合わせた鈴仙は、仕事がある為参加出来ないと落ち込んでいた。次郎はそんな鈴仙に”何か土産でも持ってくるよ”と言い、鈴仙はにんまりとしていた。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜と門番の紅美鈴もその横に居て、美鈴は”仕事が休めたら行きたいのに……うう……”と、半ば逃避のようにボヤき、”お嬢様に頼んでみる”と次郎に言われていたが、頼むだけ無駄ですと泣いていた。

静かに飲んでいた咲夜は、突然意味ありげな笑顔を次郎に向けたと思っただら、次の瞬間消えていた。能力を使ったのだらう。次郎はなにやら寒気を感じ、”紅魔館の人間に、出発日を教えたらダメ”だと臆気に考えたのだった。

そんなこんなではからずも”喰いものや社員旅行”の様相を呈してきたイベントが、突発的ではあるが来週末に決定したのだった。

幻想郷、とある某所

「ねえ、咲夜？当然私は行くべきよね？」

赤より紅い血の色の如き壁に囲まれた玉座の間、そこに鎮座する夜の盟主。側に控えるは完全に瀟洒な従者。

「当然でございますお嬢様、いつもの二回りは大きい日傘も既に準備してございます……」

銀髪の従者は無表情であるが、崇める主人に十全の忠誠心を滲ませ答える。

「ふふつ、周到なお前が好きよ？」

主人は八重歯と言つには鋭すぎる犬歯を剥き出しにして、その顔に獰猛な嗤いを浮かべた。

「勿体のうございます」

従者は恍惚とした表情で膝まずく。

「……咲夜、おやつにバナナを入れたかしら？」

「もちろんでございます」

「……咲夜、イチゴの飴はどうかしら？」

「当然、真つ先に……」

「流石よ、咲夜。それじゃ……「やわらかキャラメルも当然入れて」  
ございます」

「じゃあ弁当には？」

「タコさんウインナーを……」

「ならば咲「ウサギさんリンゴも当然、入れてございます……」

「ふっふっふっ……」

「クスクスクス……」

幻想郷一の苦勞人、十六夜咲夜の真骨頂がここに極まった。

「……入りづらい」

門番の呟きがどこか切ない紅魔館の一コマであった。

「さあ、点呼をとるぞー！チルノ！」

人里の寺子屋の前に集まる人ばかり、その中心で次郎が叫んだ。今日は遠足の日である。

「はい！」

ぴよんぴよん跳ねながら、全身で喜びを表すチルノ。

「妹紅！」

「……あいよ」

トレードマークの赤いモンペに手を突っ込む藤原妹紅。若干やさぐれた態度なのはご愛嬌。素直ではないのだ。但し顔は微妙ににやけている。

こうして次郎の屋台メンバーに大妖精やリグル、ミスティア等が次々と点呼に答えている。

「さて、全員揃ってる……んんん!? レミリア… スカーレットさん？」

「仕方ないから来てあげたわ！」

点呼が終わったと安心した次郎の視界に、吸血鬼のお嬢様とやたら大きい日傘を持ったメイドが目に入った。お嬢様は偉そうな言葉を吐きながら、満面の笑みでビシッと手を挙げています。パンダのアップリケがキュートな手縫いのリュックサックと、袈裟がけにかけた真っ赤な水筒が愛らしい。

「（妹紅、チルノ、誰かレミリア誘ったか？）」

「（あたいは誘ってないよ？）」

「（次郎さんが誘ったんじゃないのか!?)」

慌てた次郎は、妹紅とチルノにひそひそ問い質すが二人はぽかんとしている。

「（い、いや、俺じゃないが……なんか本人が妙にやる気出してると連れてこっ……）」

「（うん……）」

と、刹那の作戦会議は終了し、調和と言うつ和を選択した面々であった。

「や、やあレミリア。よく来てくれたな？ 咲夜は……ご苦労様？」

「次郎、親友の為に仕方なく来てあげたわ？ どう、嬉しいでしょう？」

「ああ、こんな朝からお前さんに会えるとは意外だが、取り敢えずよく来てくれたな」

次郎は差し障りの無い会話を交わし、若干怯えた表情のちびっこ組に大丈夫だと言う視線を飛ばした。そして咲夜と”お互い年頃の子供を抱えて大変ですわね”的な、朝の幼稚園で親達がするような会話をこっそり話す次郎であった。

兎にも角にも、若干の混乱を見せたが、こうして秋真つ盛りの幻想郷を歩く遠足は動きだすのだった。

「よし、点呼が終わったところで今日のスケジュールを発表するぞ。お前さん達は妖しや妖精、そして吸血鬼など普段は飛んで移動するのが当たり前だ。それを敢えて歩いて幻想郷を巡り、肌で季節を感じて、それを皆で分かち合おうと言うのが今回の趣向だ。華やかに色付いた紅葉を愛でながら、怪我をしないように楽しもうじゃないか。尚、トラブルはごめんだ。道中に別の妖しと出会っても、極力衝突はしないように。後、全員分の弁当とおやつは用意した。まあ楽しみにしてくれ。じゃあ行くか」

次郎の宣言を持って、一同は人里から歩を進め

「なあ次郎さん、ところで目的地はどこなの？」

まだ遠足は始まらない。妹紅のしごく当たり前な質問により。

「ああ、言つてなかつたか。紅葉を楽しみながら、守矢神社を目指す。きつと山の上から見渡す景色は最高だぞ？じゃあ行くか。のんびりな」

妹紅を始め、一同は思った。守矢神社を目指すと言う事は、妖怪の山を登ると言う事だ。次郎は分かっているのか？妖怪の山に住まう天狗達は酷く排他的な事を。縄張り意識が高く、それを侵す者に容赦をしない事を。

幻想郷の管理者は言った。全ての存在を受け入れる、と。そしてこ  
うも言った。それは残酷であると。

酷く抽象的な表現であるが、そうとしか言いようが無いとも言える。つまりは外の世界のように理性的に他種族が共存する為の縛りが無いのだ。

とは言つても、外の世界では人種の違う人間と、自然に住まう野生動物程度しか存在しないのだから当然と言えば、当然なのであるが。

だが幻想郷は様々な神々、妖し達、人間、妖精、月の民等、そもそも相容れない存在が混沌と共存する場所なのだ。つまり、理性的に共存すると言う前提が無いのだ。

天狗は天狗の。吸血鬼は吸血鬼の。妖しは妖しの。それぞれが存在意義を主張し、そして一切妥協はしない。極端な話人里を離れた人間が、野良の妖しに食われたとしても、それは食われた人間が悪いのだ。何故なら妖しにとって人間とは、ただの食糧でしかないからだ。但し、例えば狩られた人間の仲間が、それを許さずに仇と称し

てその妖しを殺しても構わない。何故なら狩られる妖しが悪いのだから。

つまり幻想郷とは、自由を約束された楽園ではあるけれど、絶対的な不文律として、弱肉強食の理があると言う事だ。そして唯一であり普遍的ルールが 幻想郷の存続こそが、何よりも優勢されると言う事なのだ。故に、弱者には地獄である。それを称し、管理者たる女性は残酷であると言うのだ。

妹紅は更に思った。こいつ、何も考えてないなど。先頭をずいずい進んでいく次郎は、早速手頃な棒を拾い杖のように突き、ルーミアを肩車し、両腕にはチルノや大妖精、リグル等に懐かれ楽しそうだ。まるで家族サービスに勤しむ休日の父親の姿だ。

事実、次郎は何も考えていなかった。が、何かあってもどうにかなると考えている。今までそう生きてきたからだ。妹紅の心配を余所に、次郎は進む。紅葉麗しい妖怪の山へ。

(ま、次郎さんに襲い掛かる天狗がいたら、燃やせばいい事だ)

妹紅は人知れずにやりと笑い、先をゆく次郎の広い背中を見つめた。あの、どこことなく頼りがいのある男の背中を。

さて、この不思議な集団の奇妙な遠足は始まった。はてさて一体どうなることやら。この続きは次回のお話……



登場人物

はしゃぐ引率者、次郎

背中を望む、藤原妹紅

ちびっこ隊代表、チルノ

ちびっこ隊員、大妖精

ちびっこ隊員、リグル

ちびっこ隊員、ミスティア

ちびっこ隊員、ルーミア

バナナはおやつ、レミリア

瀟洒な苦勞人、十六夜咲夜

師匠が厳しい鈴仙・優曇華院・イナバ

門番は大変、紅美鈴

先生は忙しい、上白沢慧音

奔放自在、行楽の秋 その？（後書き）

寸どめ申し訳ない

言い訳ですが、聖蓮船のメンバーを二次作品でしか知らない為に、いま情報集めに奔走しとります。なんかあの作品のキャラ設定ばくね？みたいなのは嫌なので^^；

いま書いてますが、ストーリーはある程度書けてますが会話で悩んでいます。

自分の嫁だと思っ方、アドバイスお待ちしています オイ

しかし、むしゃくしゃしておぜうのカリスマブレイクしてしまった。反省はしてるが後悔もしてる。だって間が持たなかったんだもん

さて、頑張って続きを週末土日くらいでupします。

いつも駄文に付き合っただき、本当にありがとうございます。

## 奔放自在、行楽の秋 その？

守矢神社　妖怪の山の山頂近くに建っている神社である。そこには二柱の神様と、一人の風祝がいる。

一柱は風と雨を司る神様、八坂神奈子。

もう一柱は様々な祟り神達を束ねる土着神の頂点に君臨していた神様、洩矢諏訪子。

そして人間でありながら様々な奇跡を起こし、生きたまま人々の信仰を集めて現人神となった東風谷早苗。最も、現在は八坂神奈子の巫女を務めている。

そんな存在が住まう守矢神社であるが、近年この幻想郷に神社ごとやってきたのである。　であるが、いかんせん人が恐れて近寄らない妖怪の山にあるため、当然閑散としているのであった。

「神奈子様、今日も誰も来ませんねえ」

境内の落ち葉を掃きながら、早苗がボヤク。

「そつだねえ」

障子を開け放った部屋で肩肘を枕に横になる八坂神奈子が、気の無い空返事を返す。

「諏訪子様、どうにかなりませんかあ？」

不甲斐ない主にため息をついた早苗は、もう一柱である洩矢諏訪子を見た。

「んんん……それより早苗、お腹が空いたよ。何か作っておくれよ」  
ぎよろりと動く不思議な目玉のついた自慢の帽子を磨きながら、洩矢諏訪子が早苗にご飯を催促する。

きっと私は巫女ではなく、この妙に人染みた神々のおさんどんなの  
では無いだろうか？いや、きっとそうだ。心でこっそりと呟いた早苗は、竹箒に寄りかかりながら空を仰ぎ見るのだった。

「誰か参拝に来ないかなあ……」

早苗の小さな呟きは、秋真つ盛りの幻想郷の空に吸い込まれた。

快晴の空の遙か上、いわし雲が連なっている。とんびがひゆるりと輪を描いた。

## 東方御伽草子

現在次郎ら一行は、次郎を先頭に魔法の森を進んでいる。チルノを

代表にちびっこ達は次郎にまわり付き、それを羨ましそうに見やるレミリア・スカーレット。その従者である十六夜咲夜は日傘を構え、淡々とその職務を果たしていた。

妹紅は次郎と並んで歩き、他愛ない会話を楽しみながら、こんな穏やかな日常は贅沢だなと一人意味ありげに頷いている。

とにかくそうして、やたら賑やかな集団は、それぞれがそれぞれの遠足を満喫しているようだった。

ある異変に咲夜が気が付く迄は……。

誰かさんが 誰かさんが 誰かさんがみつけた

小さい秋 小さい秋 小さい秋みつけた

めかくし鬼さん 手のなる方へ

澄ましたお耳に かすかに染みた

呼んでる口笛　もずの声

小さい秋　小さい秋　小さい秋みつけた

次郎が歌いはじめた日本の童謡をチルノ達が真似し、それがいつしか大合唱となっていた。妖精も妖しも、吸血鬼も人外も何やら楽しくなり、腕を振っては笑顔で行進している。

だが、一人首をかしげている咲夜。彼女は先程から異変を感じていた。何故ならば

人里から北にある妖怪の山が、最初は正面に見えていた筈が、それがだんだん右側に見えていた。暫くすると後方に位置を変え、現在は左側に見えている。

咲夜が感じた異変　それは簡単に言えば、一行は魔法の森をぐるぐる回つていると言う事だ。つまり、道に迷っているのである。

ただ悲しい事に、咲夜以外誰もそのことに気が付いてはいないのだ。誰もご機嫌で笑顔の行進を続けている。この企画の責任者であり引率者たる次郎は、ご満悦で一行を率いているが、どうやら彼は性質の悪い方向おんちであるようだ。

幻想郷一番の苦勞人、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜は意を決して次郎に声をかける事を決めた。例えこの空気を切り裂く事になったとしても、だ。

何せ、出発して既に半日近く経過しているのだから

「次郎様、お楽しみのところ申し訳ありません。ですが、守矢神社どころか魔法の森を抜ける事すら出来ておりません。あの……道に迷われたのでは?……」

咲夜の控え目な進言だったが、彼女の鈴の音のような声が思いの外響き渡ってしまった。

「つけた〜……………えっ!？」

次郎が立ち止まる。必然的に一行の行進も止まる。

「ん……そう言えばおかしいな。随分腹も減ったし、そろそろ昼時だな。むう……どうやら咲夜が言う通り迷ったらしいな」

次郎は神妙な顔をして腕組みしている。方向おんちを指摘しないのは咲夜の優しさであった。

「ジロ、あたい、お腹空いた!」

「チルノちゃん、そんなはつきり言わなくても……」

「ジロさん、一休みしませんか?」

「その方が良いかも知れませぬね」

「そーなのかー」

ちびっこ達は次郎を責める気は無さそうだが、どうやら彼女達も疲れを自覚したようだった。

「次郎さん、あの寺で一休みさせて貰わないか？レミリアも日陰の方が楽だろうし、茶も沸かせるでしょ？」

そういつて妹紅が指差した先には、古ぼけた寺が見えた。

「と言うか申し訳ない、みんな。迷ったのは俺のせいだ。妹紅の言う通りあの寺で軒先を借りて、昼飯を食おう。すまんな」

ぺこりと一同に頭を下げ、次郎は恥ずかしそうに笑った。つられて一同も笑う。こうした不測の事態も、ある意味行楽の醍醐味なのかもしれない。

そうして一行は、古びた寺へと目的地を変えるのだった。

命蓮寺　聖白蓮が建立した寺だ。名前は彼女の弟からの命名である。古びたと言うのが正しい外観であるが、それは少しばかり理由がある。

この寺は元々船であったのだ。ある異変で使われた聖輦船せいれんせんと言う名のその船を、守矢神社の神様である洩矢諏訪子が均し、その場所に降り立ったのだ。それがこの寺の骨格となっている。

この寺には現在、聖白蓮を始め、毘沙門天の弟子である寅丸星、そ



の目付けであるナズーリン。聖輦船の先頭の村紗水蜜、見張り番の雲居一輪と雲山、天の邪鬼な封獣ぬえ、寺の墓地をふらふらしている多々良小傘などが住んで（棲みついて）おり、実はこの幻想郷で一番の大所帯であったりする。

そんな命蓮寺の周りを、見張り番である村紗水蜜が掃き掃除をしていた。一段落した村紗はお茶でも飲もうかと思案していると、魔法の森からこちらに向かってくる怪しい集団が見えた。

先頭の人間に小さな妖精がまとわりつき、さらに妖怪や吸血鬼を従えている。そう、次郎達なのであるが、村紗には異様な集団にしか見えなかった。

「……どちら様？」

次郎達一行が命蓮寺の門にさしかかった所で、雲居一輪から声が掛かった。次郎はもやもやとした白いものを浮かべた一輪を見ながら足を止めている。

このもやもやは雲山と言う。これは一輪の能力、入道を操る程度の能力で使役している入道なのである。白いもやもやに厳しい顔が付いている雲山は、これでもれっきとした入道なのだ。

「怪しい者では無いんだ。すまんが中に入れてほしい。俺は人里で屋台をやっている次郎と言う」

取り敢えず無難な挨拶を試みる次郎だったが

「こんな大挙して妖怪や妖精がやってきて、怪しくないなんて無理

「と言つものだね？」

「……礼儀を知らない小娘が。私を妖怪と見間違つなど無知もいいところね？そこ邪魔だから避けなさい。幽霊風情が」

歩み出たレミリアが不敵な笑みを浮かべて一輪を睨む。

「レミリア……ややこしくなるから黙つてくれ……」

「次郎、こんな幽霊如き羽虫を甘やかしちゃいけ……！？ちよ、次郎！？むぐー！むぐー！」

尊大な言い回しで喧嘩を売るお嬢様を、次郎は後ろから羽交い締めにして抱き上げた。暴れてバタバタもかくレミリアの口を押さえ、物理的黙らせた次郎だった。羽をばたはたしながら足をばたつかせるレミリアに、吸血鬼の貫禄もあったもんじやないなとため息をつく次郎。そしてその後ろから申し訳なさそうに、目礼で主の暴走を詫びる咲夜が虚しい。

「……随分と好戦的な娘さんだね？益々通す訳にはいかないね」

ずい、と威圧するように前に出る一輪。

「いやいや、俺達はただ道に迷っただけさ。因みにこのチルノと妹紅はうちの従業員だ。他はチルノの親友と、この可愛らしい吸血鬼は俺の親友。そのメイドさんは主に従つてついてきたが、俺の友達でもある。で、俺は名乗った筈だが？そもそも寺に来た人間を威嚇するのがこの寺の作法なのかい？」

小脇にレミリアを抱えたままの次郎が、一輪の前に歩み出て言い放

つ。少しづつ彼の口調の温度が冷えていく様だった。

次郎と言う男は普段は温厚であるが、昔から人と人は礼を尽くしあうべきと言う考えの人間である。それは彼がこの幻想郷に来てからも変わらない。

幻想郷と言う土地は、あらゆる現実から隔離された結界で守られている。そして、そこにはいくつもの勢力がコミュニティを形成しており、各勢力が様々な個性を発揮しているのだ。

ただ他勢力との折り合いが良いグループもあれば、敵対しあうグループもある。そして、一つだけ共通している事がある。それは”基本的に新参者には酷く閉鎖的である”と言う事柄だ。それぞれが自分の身の身を守る為である。

少なくともそれぞれの物理的な力関係に差がある以上、一番無難な護身とは”始めから関わりを持たない”事である。故に閉鎖的にもなるだろう。まして命蓮寺の者達は、とある事情により人間を信用していない。

一連の一輪の対応は、そういった事情があつての事なのだが、次郎には関係の無い話だ。名乗ったのだから名乗れ。それが次郎のベクトルである。

「……失礼しました。私は雲居一輪と申します。こちらは雲山と言います。私はこの寺の見張り番をしているわ。こちらの事情により、敵意のあるものは排除するようにしているんだよ？次郎さん」

「……………」

相変わらず剣呑な瞳のまま、一輪は次郎を睨む。彼女の背後に居たはずの雲山も前に出て来て威圧感を漂わせた。

「ま、こちらは特に敵意は無い。な？レミリア？」

「うー！うー！」

「??？」

「うー！うー！うー！」

「次郎様、お嬢様の口、押さえたままです……」

次郎に小脇に抱えられ、口を押さえられたままのレミリアは、涙目で抗議している。咲夜に言われてそれに気が付いた次郎は、彼女を漸く解放した。

「……次郎の馬鹿。後で血を吸ってやる」

恨めしげに呟くレミリアは見なかった事にして、次郎は村紗を睨み続ける。

「……ぷっ……アハハッ！！人間の癖に吸血鬼と戯れあうなんて、信じられない人間だね。どうやら私が神経質になりすぎていたようだわ。と言うか貴方なら聖様も気に入りそうね。……分かった。本堂まで案内するよ。ついてきて」

そういつて一輪は一行を先導して歩きだした。

「ジロ！あたい早くごはん食べたいよ！はやく行こう！」

「ジロ、行かないのかー？」

ちびっこ達は緊張感の欠片もなく、次郎の手を引っぱる。妹紅はさり気なく舌打ちしながら、一番後ろを歩いていく。どうやら彼女は次郎を威嚇した一輪が気に入らないようだ。

そして、雲居一輪が本堂の前に立ち止まり、次郎達を中へと促す。

「聖様、お客さんが来てますよ？中へ通しますね？」

「ご苦労様」

次郎達が本堂に入ると、そこには少し大人びた印象の少女が座っていた。藍色のような髪が毛先に向かってグラデーションになっている不思議な髪色をしている。

がやがやとしながら入ってくる次郎一行が座るまで、少女は静かな笑みを湛えていた。

「歓迎するわ？御客人。私がこの寺の住職をしている聖白蓮よ。人の出会いとは一期一会。満足なもてなしは出来ないけど歓迎するわ？」

笑顔の少女、聖白蓮はどことなく貫禄を滲ませた笑顔で次郎達を迎え入れたのだった。

妖怪の山の山頂近く。守矢神社の境内。東風谷早苗は、少し傾いた太陽の光に眩しそうにしながら、相変わらず落ち葉を掃いていた。

「はふう……今日も誰も来ないのかなあ」

どうやら未だ誰も来てはいないようだ。

「早苗や〜!!」

「ご飯はまだかい!？」

神社の中から聞こえてくる言葉に、整った顔の早苗の綺麗な顔が陰った。

「いま作りま〜す!!」

小走りで社務所に駆け込む早苗のこめかみに

小さな青筋がひとつ

つづく

登場人物

無類の方向音痴、次郎

次郎に仇為す馬鹿は許さない藤原妹紅

ご飯食べる妖精、チルノ

ちびっこ隊員、大妖精

ちびっこ隊員、リグル

ちびっこ隊員、ミスティア

そーなのかー？ルーミア

カリスマ  
形あるものいつか壊れる（ブレイク）、レミアア・スカーレット

最近妙に胃痛胸焼けが……十六夜咲夜

ぐーたらが正義、八坂神奈子

ぎょろりと動く目玉帽子の仕組みは禁則事項、洩矢諏訪子

この米噛みの青筋は、天下御免の向こう傷……ご存知閑古鳥神社退屈  
巫女、東風谷早苗

変な髪色言つな！聖白蓮

あんなあ？うち、こんな服装やからって関西出身ちゃうねんで？寅丸星

鼠です。ナズーリン

取り敢えず凄んで見ました。雲居一輪 & amp; 雲山ペア

……別に紹介されたい訳じゃないし……封獣 ぬえ

アムラー（古っ）みたいにムラサーと読んで？ 村紗水蜜

うらめしやー！……うらめしや？……うらめしや（笑）

／＼うらめしや！／多々良小傘



奔放自在、行楽の秋 その？（後書き）

漸く命蓮寺に辿り着きました。次回で聖蓮船は終わりです。

とつとつおぜつに「う〜」言わせてしまった。すいません。誘惑に  
負けました。

中々進まずにごめんなさい。

東方御伽草子〜If 其の巻（前書き）

W A R N I N G

警告します。この外伝Ifは、ご都合主義やキャラクターの改変等  
が多大に含まれています。

尚、本編とは一切関連性はありません。

東方御伽草子〜If 其の壱

「あなたが……次郎ね？」

ひすい色の艶やかな髪が自然なウェーブを描き、ショートサイズの毛先が風で巻きあがり、細い首筋があらわになる。

その女性らしい特徴を掻き消すかのように、彼女 風見幽香は獰猛な笑みを浮かべ、対峙している次郎を睨み付ける。闘争への興奮か、時折その薄く淡いさくら色の唇を舐める舌が堪らなくエロティックである。

「ああ、俺は次郎だが？何を今更……だいたいお前さん、何度も店来ては飲んだくれてるだろうが？」

「……クククツ。怖じ気づいたのかしら？次郎。男女が差向い、お互いに隠しきれない戦闘能力。なら、ヤル事は一つじゃないかしら？」

そういつて幽香はサディスティックに嗤う。風見幽香と言う存在は、この幻想郷においてある意味一番アンタツチャブルな存在であると  
言える。

どの存在とも馴れ合わず、花を求めて幻想郷中をさ迷い歩く。花へ注ぐ愛情は母性愛のように彼女を柔らかくする。だが、他人へは話が変わる。

彼女を知る者は畏怖と恐怖を込めてこう称する。”美麗なる戦闘狂”と。ターゲットにされた者は逃げる事を許されない。本人の都合など考慮などされはしないのだ。要は、幽香が戦いたいかそうでないかの選択肢のみである。

なんというエゴイズムッ

なんという雌度ッ

故に彼女は風見幽香なのである。

時は21世紀

場所は幻想郷

華やかな花が咲き乱れるのどかな平原

であるにもかかわらず、幽香の網膜を通した脳には、まるで別のものが描かれていた。

自分の前に立ちはだかるこの雄<sup>オトコ</sup>

自分よりも遙かに若いこの雄<sup>オトコ</sup>が

かつて数千年前の大和の地で

己と雌雄を決した好敵手<sup>ライバル</sup>たちと同等の力を有している！！

「さあ、闘いましょう？次郎。私はもう我慢が出来ないわ？さつきから私の蜜が止まらないの。貴方のせいよ？責任をとりなさいッッッ！！」

ぞわりと逆立った髪を振り乱し、風見幽香の肉体は、その末端にいたるまで血液を送りこんだ。

パンプアップ

風見幽香は準備を終えた。ギリギリまで引き絞られた弓のように

静寂の中に隠れる暴力の塊

後は放つだけであつた

次郎はふっ、とため息を漏らして首を軽くふつた。いつものチャイナスーツに着流しを羽織つた次郎が、いま現在顔を上げた。

風見幽香の身体に緊張が走る。いま目の前の雄オトコが漸くヤル気を見せた。

あの雄オトコの戦闘能力は未知数。

だが、風見幽香は油断しない。

強者であるからこそ慢心はしない。

だから

「……………茶番はもういいかな？ごちやごちや言っていないでツケを払えよ。さつさとな？次は博麗神社に追い込みかけるから忙しいんだよ」

「クククツ……………怖じ気」

「それは良いから金払え」

「マスタースパ……………」

「はいはい凄いい。マスパマスパ。い　い　か　ら　金  
払　え」

「……………いわよ」

「ああん？」

「無いわよお金ー!!」

「うわあ……逆キレですか。盗人猛々しいにも程があんだろ……」

「……で?何この傘」

「……日傘です」

「先っぽからなんか出てるよね?俺に向けて」

「違います。これはあなたへのあふれ出る愛です」

「いやいやいや、さっきマスパとか言ってたでしょう?完全に殺して誤魔化す気だったよね?」

「ちょ、次郎こーわーいー ゆうかりん泣いちゃうよ?」

「……気色わるっ」

「……」



「……………まあいいわ。身体で払ってもらおうから」

「えっ！？ホントに！？むしろこっちとしては願ったり叶ったりと言うか……………むしろ計画通りと言うか……………勝負下着装備中だからバッチこい？」

この日から数日、人里の名物屋台喰いものやでは、大妖怪風見幽香と、博麗の巫女霊夢が扱き使われていたと言っ。

正従業員であるチルノと妹紅は、久しぶりの連休を楽しんだという。

東方御伽草子（エフ） 其の巻（後書き）

ゆづかりん書きたくて書いた。

たまにこづいづの書くかもしれない。

東方御伽草子くエフ 其の貳（前書き）

ちょっと本編がまとまらず、なんかむしゃくしゃして書いた。

酒のんで書いてるからひどいウサ

ウサウサウサ……

あ、やはり本編に関係ないウサ

東方御伽草子〜If 其の貳

？『人生相談』

「シャンハイ！」

「ホラーイ！」

「ああ、そうだな。いつもすまんな」

「シャンハイ？」

「いや、割りと積極的ではあるな。いや、決して迷惑では無いんだが……な？でも、な？一応あいつは教師って立場だろう？」

「ホラーイ？…ホラーイ（笑）」

「ば、馬鹿野郎……言えるわきゃねえだろ！も、妹紅もいる訳だしな」

「シャンハイ？シャンハイ！（怒）」

「ホラーイ（怒）」

「わ、分かったよ。少し気をつけてみるよ。ありがとな？いつも」

「シャンハイ！」

「ホラーイ！」

「ああ、じゃあまた来るな。ありがとな、二人とも。ではな？」

そうして次郎は魔法の森にある洋館を出る。その顔は憑きモノが取れたように実に清々しい。

「あ、アリスいたのか？ 漬物のお裾分けキッチンに置いたからな？  
ではな」

「え、ええ、ありがとう。じゃあね？」

洋館の家主、アリス・マーガトロイドを一瞥し、次郎は颯爽と森に消えるのだった。

「……人の家に来て初めての会話が「アリスいたのか？」って……」

「シャンハイ？」

「ホラーイ？」

アリスは自分が造り上げた二体の人形を抱き上げた。

「貴方たち、どうして次郎と会話が成立しているのかしら？ と言っ  
か私とも話しなさいよ？」

「……………」

「……………」

「えええ……………何この扱いの悪さは……………」

そうしてアリスは、自分が与えたルーチン外の行動をする二体に首をかしげながら、妙に懐かれている次郎に嫉妬するアリスなのであった。

？『イナバの黒つさぎ』

「で？あんたはどうしたいのサ？」

先ほどから彼女は苛立っていた。彼女の名前は因幡てると言う。彼女自身いつたいどれ程生きたか分からない位の長生きをした兔だ。

彼女は元々、野に生きる普通程度の兎でしか無かった。ただ、妙に健康思考が強く、人参からオオバコの葉に至るまで、とにかく上質なものの以外口にしなかった。気が付いたら彼女は人化した妖怪兎となっていた。

世を彷徨い、健康を突き詰めた彼女は、終のすみかを選んだのは迷いの竹林だった。なにせ喧しい天敵もいない。たまにタケノコを狩

る人間が迷い込むが、迷った挙げ句に勝手に野垂れ死ぬから彼女としては気楽なものだ。気が向けば気まぐれに助けたりもするが。

そもそも、因幡てゐには人間に幸運を与えろと言つ能力がある。彼女に触れさえすれば、人間限定ではあるが何らかの幸福に与れるのだ。

但し、基本的に竹林で過ごす因幡てゐに人間が出会うと言つシチュエーション自体、人間が遭難している訳であり、運良く彼女に出会つた幸運な人間が受けられる恩恵は、「竹林から無事にでられる」に限定されてしまう。

故に因幡てゐは思う。人間とは救い様のない馬鹿だ、と。

そんな因幡てゐが棲みついた竹林であるが、近年新しい住人が増えた。

月からやってきた蓬莱人である。彼女達は不老不死の怠惰なお姫様である蓬莱山輝夜と、天才的な頭脳と美貌を兼ね備えた薬師、八意永琳とてゐに名乗つた。

何でも罪を犯したとかで地上に逃げてきたらしいが、ひよんな事から迷いの竹林を知り、隠棲するには都合がいいと思つたらしい。

だが因幡てゐからしたら、邪魔以外のなにものでも無い。そんな罪人が住み着けば、必ず厄介事が起きるに決まっている。因幡てゐはそう考えた。まして竹林には今や数百を越える兎達が住み着いている。その盟主である因幡てゐは、蓬莱人が心底邪魔に感じた。

だが蓬莱人はてゐがいない隙に、永遠亭なる館を勝手に建ててしま

った。

頭にきた因幡てゐは、この竹林は私たち地上の兎の住みかであり、後から現れたお前達が自己主張するなど盗人猛々しい。偉そうにするなら出ていけと八意永琳に言い放った。

そこで八意永琳は因幡てゐに取り引きを持ち掛け、それは兎達にとつても魅力的であつた為、互いに共存を始めたのであつた。

もつとも、因幡てゐが承諾した一番の理由は、月の蓬莱人が地上を穢れてると忌み嫌つたと言う永琳の話を聞いて、草木も生えない月に住む蓬莱人とやらを気持ち悪いと感じたからだ。

何故なら地上には因幡てゐが愛する人参があるのだから。甘く芳しい人参が。月の痩せた土地を好むなど、てゐに言わせたら蓬莱人の頭の中こそが穢れてると思つたらしい。

因幡てゐは退屈が嫌いである。そこで退屈しのぎに思いついたのが悪戯である。

人を落とし穴に落としたり、八意永琳のレースのシヨーツに穴を開けたり、一日のほとんどを寝て暮らす蓬莱山輝夜の艶やかな黒髪を、八意永琳の服と同じ赤と青のツートンカラーに染めたり……等、多岐に渡つて悪戯をした。

かつては馬鹿な鱗を騙し、背中を毛をむしられた彼女であるが、スカツとするから止められないのだ。

後に月から逃げてきたと言う月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバ等、てゐの恰好の獲物となつた。



鈴仙は恐ろしく臆病であり、そして善くも悪くも純粹だった。鈴仙は永遠亭の住人となり、八意永琳の弟子として因幡てゐ達地上の兎との窓口となった。

そんな彼女を通し、永遠亭の住人達と因幡てゐはいつしか奇妙な親愛の情を抱くようになるが、調子に乗られたら癪なため、てゐはそれを言わない。

ただ鈴仙とてゐは、幻想郷の外の世界にある物語の登場人物、猫とネズミの不思議な友人関係に似た関係になっていった。

てゐが悪戯をしかけ、怒った鈴仙が追い掛け回す。だけど結局、気が付けば二人は一緒にいるのだ。

さて、そんな因幡てゐであるが、話は冒頭に戻る。

先ほどから人參畑に現れた鈴仙が、もう一刻はてゐに愚痴を吐いている。

やれ師匠は横暴だ、だの

やれ姫様は服をたたむことすら出来ない、だの

因幡てゐには迷惑この上ない。本当に面倒臭い女だとてゐは思う。

そして何より、これらは前振りでしかなく、本命の相談は「次郎と  
言う男と親密になりたい」だった。

そんなもの、木陰に引きずり込んで交尾でもしたらいいだろうに…  
…と、てゐが言えば

やれ破廉恥だ、だの

やれ嫌われたくない、だの

やれ痛かったらどうしよう、だの

本当に面倒臭いと因幡てゐは逃げ出したくなった。自己主張は強い  
くせに、具体案を言えば萎縮する。ああ面倒臭い女だ、てゐはそう  
叫びたい衝動に駆られた。

だから

「だったら、取り敢えず無難な贈り物をすればいいサ」

「お、贈り物？いきなり変じゃないかな？」

「馬鹿だねあんたは。いいかい？あんたはその屋台の常連サ。まし

て一番最初はご馳走になったのだろう？ならそのお返しサ。変じやないだろうサ」

「な、なるほど！流石はてゐだ、ずる賢い！」

「はっ倒すよ？」

「ご、ごみん…で何を贈り物にしたらいいかな？人参がいいかな？わたしは異性に贈り物なんかしたことはないもん……」

「本当に馬鹿だねあんた。いきなり生の人参渡されたら、その人間はぼかんとするよ……。まあ待つてな。良いものがあるヨ」

そういつてどこかに消えたてゐが、半刻ほどで戻ってきた。

「ただいまだよ」

「おかえり、てゐ。何持つてきたの？」

鈴仙はてゐが小脇に抱える、綺麗に包装された箱状の物を指差した。

「師匠から貰った滋養強壮剤の詰め合わせサ。その男は毎晩休みなく働くのだろう？なら、身体気を付けて下さいと言ってそれを渡す」といふヨ」

そういつて因幡てゐは素晴らしい笑顔を披露した。

「てゐ……ありがとう！じゃ早速行つて来る！大好きてゐ！」

無邪気に笑いながら、鈴仙は人里方向に飛び立った。

「あゝ恋する乙女は健気だねえ。ま、いつか……」

ニヤリと黒い笑みに切り替えた因幡てゐがほくそ笑んだ。

「じ、じろつさん」

「ん？鈴仙じゃねえか。いらっしやい。」

「ああああの、こここれをごぞつっ！！つまつまつまらないものですぎや」

「取り敢えず落ち着こうや……な？」

「はい……はふうはふう……はい、大丈夫です」

「なんだこれ？プレゼントか？」

「はい、お疲れのじろつさんに滋養強壮剤をと思ひまして……」

「すまねえな、気いつかわせちまったな。お前さんの師匠の薬なら間違いないな。開けてもいいか？」





東方御伽草子くエフ 其の貳（後書き）

アリスとてゐの話

どっちも嫁ウサ

誰だよウサウサはじめに言ったやつ

阿求とにとり辺りを次投稿したら本編投稿しますわ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4962x/>

---

東方御伽草子

2011年11月8日04時15分発行